

---

# 私がうちはの彼とか無理すぎるw

銀月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私がうちはの彼とか無理すぎる

### 【コード】

N1429U

### 【作者名】

銀月

### 【あらすじ】

日々をまつたり生きてる普通の彼女が、何を間違ったのかうちはの彼に？ 性別不一致に悩みつつ（いや、悩むのか？）今度は必死に生きていく予定 処女作の為、生暖かい目でお願いします。 作者の原作知識はあるいです。外見BLになるかもしません。ご注意下さい。

## 1・夢ならよかつた

深い微睡みに包まれていた”私”の意識が、ゆっくりと浮上していくのを感じる。

……そういえば今日って仕事なのかな……あれの仕上げる期限っていつだっけ……

またあの怖いおっさんのお話聞かなきやいけないのか……

……冷蔵庫のプリン忘れてた……まあそのうち……あ、賞味期限切れでないかな?

ああ……もつと好きな服着ていけたらなあ……

……どうでもさだまらない思考と格闘する」とを早々に放棄し、ゆっくりと目を開く。

しかし、周囲は霧でとぎれわれているかのようで、視界はあてにならない。

ぼんやりと何かが見えるような気もしないでもないが。

霧? 霧といえば山道か……あれ? 最近自然と触れ合っていないはずだけど。

これ以上暗くならないうちに帰らないと帰れなくなっちゃうな。

うーんなんだか体がうまく動かせないなあ。

ああ、もしかしてあれか。もしかしなくとも夢の中だね?

夢の中で意識保ちつつ、自由に夢を操る練習とかしたなあ……ちつとも自由になんてならないけれども。

やつぱつこには飛ぶべきでしょ。あんまり頑張ると田原めちやうつけどね?

飛びつてどうやるんだっけ。メヴェがあればいいんだけど。ヴォンツバシユツテね。

今日は羽もついてないしなあ……

よしひこには気合で…… ょつ！ ほりやつ！ といやつ！

うう……ダメだ……やつぱり自由になんてならない。  
なんだか意識もぼーっとしてきたみたいだし。

もうちよつと微睡んでてもいいよね？ 田覚ましあるし。

ビリにもままならない夢を放棄し、もう一度”私”は意識を手放した。

最近めつせり”無沙汰して”いる早朝の田舎の空氣に触れ、”私”的意識が浮上していくのを感じる。

この、縁豊かな大地を思わせる空氣は結構好きだつたりする。

社会に出てからずっとHアコノ快適生活だしね。外は空氣悪いし。  
田覚ましが鳴った記憶は無いので、少し早く起きすぎたかと思いつつ、ゆづくじと田を開ける。

そこには見慣れ……ない木造の天井が広がっていた。  
遠い記憶にある旅館や実家のそれに似ていなくもない。  
だが、あきらかに自宅のマンションではない。

軽くめまいを感じつつ、状況を把握する為、体を起こそうとする。  
が、そんな意思とは別に、体は一向に動かない。

そんなはずは無いと思いつきり身動きし、助けを求めるかのように出した手が視界に入ってきた。

「……あう？……あうえ！？！？」

「なんぞこれえええ！？！」

なんでこんなちっちゃな手があるの！？

軽く握り潰せそうじゃないかついでにや潰してどうする！

つていうかありえないって、ありえないってばっかり子供産んだ記憶無いよ！？悲しいことにね……？

あつこれ私の手か……さきにさきしたらちやんと動いてるわいや、それよりあれば 助けてっ！ 誰かっ！ おにこちやんっ！？

## 1・夢ならよかつた（後書き）

ドストライクの小説が見つからないなら、書けばいいじゃない。  
つてことで、見きり発車しました。

初心者なので、詰めきれてない可能性があります。

読みにくい、解りづらい等あると思います。

ご意見よろしくお願いします。（ガラスハートですので、お手柔ら  
かに…）

## 2・現状を見つめる勇気をクタサイ

おはよ／＼や／＼います。“私”です。

あれから幾度となく起きては／＼のめされを繰り返し、やつと現状を見つめることにしました。

最初の頃のよ／＼、無邪気に夢だと思ったかった……

それはさつと”私”ですが、どうやら記憶がはつきりしません。そこそこ真面目に仕事してたことや、3……29歳だったこといい子は突っ込んで聞いちやダメよ？ などは覚えているのですが、肝心の名前が思い出せません。

”私”の核となるべき大事な名前……

それが無いだけで、どうにも”私”という存在が不安定に思えています。

まあ思うだけで、こ／＼こ／＼かり存在しているわけですが。

いや、もしかして”私”がこの思考を”私”と認識しているだけで、”私”なんて存在しない……？

ああ、何か閃いた気がしたけど、わ／＼ぱり意味不明だわ……

とんでも設定とか本気で困るよ？ まつたり平和に日々を過／＼したいんだから。

さて、このやけに縮んだ体……。

誰しも経験があると思いますが、今までの人生で、何度も昔に戻つてやり直したいと思つていました。

ですが、残念ながら今は過去ではないようです。

それというのも、どうもこの体、男のようなのですよ……

ありえない所にささやかな、しかし確かな違和感があるからね。慣れるしかないのでしょうかが、はたして慣れるることは出来るのでし

ようか？

うへん、どうも無理な気がしないでもない。

だってねえ、今まで30年いじょ……近くも、女の体だったんだよ？  
この違和感は筆舌に扱くし難いものがあるよね。

子供の体だったのが、まだ救いになるのかな……

なんせ、体がちっちゃいという違和感のほうが大きいからね。

どっちにしても、時間をかけて慣れていくしかない……か……

”私”の家族ですが、もうすいぶんと顔を見ていない両親と、おにいちゃんがいました。

ここに来る直前のことは、まだまだ全然思い出せませんが、たぶんずっと連絡すらとつてなかつたと思います。

仲が悪いわけではないけど、どうやら単純に”私”がものぐさだった模様。

実家もかなり田舎にあり、帰るのも一苦労だったから、結局何年も帰らずじまいだったのよね。

こんなことならせめて正月くらい帰ればよかつたなあ……  
せめて電話くらいしてあげればよかつたか……

・・・・・。

・・・・・。

……あ、あぶないあぶない沈みそつになつたによ……

気を取り直してつと、やつわづ、しかりでも両親とおこちちゃんがいるようです。

おにいちゃんと言いつつも、非常に庇護欲をそそられるのよね。

あの子は私が守つてあげるのだつ！ てね？

まあ、さすがに10歳にもならない子をおにいちゃんとは思えないしね？

とつとももない現実逃避を実施していると、部屋の外で人の気配が近付くのを感じた。

最近やつと馴染んだ視界を向けると、細く開けた入り口からそつとこちらをうかがう彼をとらえた。

子育てなんて経験無いからよくわからないが、だいたい4～5歳くらいだらうか？

うらやましいほど綺麗な黒髪が、サラサラとゆれてい。

幼い子供特有の丸みがとれてきた顔は、見飽きるひとのなことのいつぶり。

うん、やつぱり何度見ても見惚れるわーーー

この子のたまに見せる笑顔がたまらなく可愛いんだよ～ふふつ

お兄ちゃんであろうと頑張るのもまたいじらしいのよねえ

こんな弟がいたら、男女問わずよつてくる悪い虫との、昼夜問わずの激しい防衛戦が繰り広げられるんだろうなあ

むむむ、これからそうなる可能性もある……のか……？ ちょっと頑張らなきや！？

「あつ、おはようサスケ。よかつた、起きてたんだね？  
今日もいい天氣だよ。お散歩行こうか？」

そう、田下最大の悩みはこれなんですよ。

”私”がサスケとか無理すぎるwww

サスケと言えば、変態に熱愛されたり、呪印プレイ強要されたり、なんだかんだと死「フラグ」満載な彼ですよね？ ちょっとオタクな両親が、好きなキャラ名を子供に名付けた……とかなんとか、色々考えて見たものの、現実がことじりとく否定してくれました。

「あうあ……」

ああ……生きていけるのかな……”私”……

「ううとその前に、新しいのにじとじつか。」

え？ ちょっと待つて！ 心の準備がつ……

「んあつあうあ！ んうああうあ！」

やめてつそんなおもむろに脱がさないでええ！

あつちよまつ……

……つふぐ……うう……こんな可愛い子にアレの世話とか……  
ぐすつ……せめてお母様にマカセテクダサイ……うつもつお嫁にい  
けない……

## 2・現状を見つめる勇気をクタサイ（後書き）

やつとタイトルの彼が誰か判明。  
いや、別に引っ張るつもりは無かつたんですよ?  
おかしいなあ  
：

### 3・赤ちゃんのお仕事

赤ちゃんなんて寝てるだけだから、暇だよね？

そういう時期もありました。

なんせ、  
”私”  
が赤ちゃんだった頃の記憶なんて、  
遠い記憶の彼方

記憶の力は、頭だけじゃなくて、心の力でもある。

そういうえば最初の記憶つて何だろつ……結構人間の記憶つていいかげなものだよね？

何が言いたいのかといふと、小さい頃の記憶なんてあてにならない  
つと。

思考がズレたかな。  
もどしもどし。

さて、実際赤ちゃんをやつて いるわけですが。  
これが意外と大変でした。

誰よ暇とか言つた人はつ！ 出てきてそこに正座しなさい！

... エルヒ。

「」の体、かなり燃費が悪い？ といふかすぐお腹がすくのよね。  
あと、やたらと睡魔が襲ってくるようで、"私"の意識を保つのが  
結構大変です。

自分のことを自分で出来ないストレスとの格闘も、かなりのものか

なにはともあれ、体の掌握は急務よね？

ただのほほんと、ころころしつつ寝てるだけでは無いんですよ。  
それこそ体の動かし方なんて知ってるわけですから、必死になつて  
あはれてみたり。

長時間の正座の後、足が痺れてままならない状態で歩くくらい、体  
が思うように動かないけどね。

こちらでおにいさん イタチ君という名前のよつです が、

素敵な笑顔で相手してくれるから癒されるわあ  
抱きしめてあの艶やかな黒髪をなでなでしたいなあ

……はつ……べつべつに特殊な趣味つてわけじゃないんだからねつ  
！？

”私”はしっかり大人な男性しか……つて誰に言い訳してるんだろ

その笑顔に向かつて、全力ではいはいを披露しつつ、だいぶ行動範  
囲が広がつたことを実感します。

歩くのつて結構難しかつたんだね……人間つてすごいわあ

それにもしても、赤ちゃんの体の成長つぶりには驚かされます。

目に見えて動きやすさが変わるもんね？

これなら、ものぐさな”私”も飽きないかも。

疲労が溜まつてきたり、发声練習に移ります。

喋ることなんてあたりまえすぎて、練習なんて思つてもなかつたの  
ですが、チョコに蜂蜜掛けた以上に甘かつたです。

よく考えたらと聞つか、よく考えなくてもそうだよねえ。

言葉を知つても、声帯が出来上がりつてないのか、うまく操れないみたいだし。

意外と舌も「ん」かないもんだけしね？

イタチ君とか他の人がいる時は、「あうー」とか「きやー」とか「んにゃー」とか。

とにかく子供らしく、間違つても言葉にならないように、声を出す練習をしています。

赤ちゃんつてどれくらいから喋れるのかな……

本当は早く会話がしたいんだけどね……

今も以前も、”私”の近くに子供つてほとんど見かけなかつたからなあ。

ちょっと遠くの友達の所には出来たんだつけ……ああ、めんどくさがらずに行つとけばよかつたかな。

これ間違つと、異端視されかねないよね……たぶん。

「赤ちゃんつていつから喋れるの？」なんて聞くわけにもいかないし。

うう、悩みが増えるいつぱうだわ。

一人の時には、心置きなく喋る練習が出来ます。

と言つても、一人でぶつくさ危ない人みたいなことはしませんよ？

「あー、えー、いー、うー……」

つてどつかでよく聞く練習を、小声で、ばれないようになつてます。んむ、意外と力行が難しい……こんなしょっぱなで壁があるとは……

この世界特有のチャクラといつものについても、色々と試行錯誤してみました。

”私”のおにいちゃんの部屋で見た、原作のおぼろげな記憶から、体と精神から生み出すとかなんとか。

かなり昔、心臓から左手、左足、右足……と、意識を巡回させる練習とかしたなあ……

鏡があれば力が増幅される……なんて某ナルみたいなことは無いんだけどね？

……葬りたい過去は埋めてしまおう。そつじよつ。

体のほうは、なんとなくこれかな？ って思つ、力の存在を意識することが出来た。

赤ちゃんなので、その力の大部分は成長にまわつてゐる……のかな？ 子供の成長速度つてすごいからねえ。現在実地体験中だし。

さて、精神……精神か……

これってどういうものなんだろうか……？

単純に経験？ それとも精神的な強さ？ はたまたまったく別の何か？

経験なら、一応30年近く生きてるから、それなりにあると思つんだけど。

精神的な強さなら……たぶんきっとこの世界の人よりは貧弱なんだろうねえ。

だってかなり平和でのほほんと生活してた、現代日本人だよ？ 打たれ弱い自信だけはあるよ？ あ、でも一応社会でそれなりに打たれてきたか……

まあ、忍びになれば殺人なんて日常？　な、この世界の人と比べるのが間違ってると思うな。うん。

別の何かだった場合……「うんさつぱり想定出来ない。習つより慣れるとか言つけど、チャクラの概念が無い”私”の凝り固まつた意識には、なかなかに難しいことかもしれない。

あう～煮詰まつた思考はカラダにいくな～！

こいつの時はイタチ君の笑顔に癒されよう。そうじよつ。

一人で部屋を抜け出したら、追いかけて来てくれるかな？　ふふつついでに適当な本でも無いかなあ……最近活字にウエーテルカラネ？

### 3・赤ちゃんのお仕事（後書き）

赤ちゃんも大変なんだよ  
と言いつつイタチさんの笑顔こどりぱりハマつてるところお話を

#### 4・弟が出来ました。

緑が濃くなり太陽が勢力を増す季節、ボクに弟が出来ました。

赤ちゃんを間近で見るのは初めてですが、へたに触れば壊れそうなほど小さいです。

最初はどうやって接していいか迷いましたが、おそるおそる伸びた手に、暴れることなく抱かれてくれました。

そのまますぐに寝っちゃいましたけどね？ ちょっと残念です。

弟は時々、真剣な目で、どこかを見つめていることがあります。その視線の先には、特に何があるというわけでは無いのですが。ボク達がそばにいる時には、そんな素振りはありません。

赤ちゃんっていつたい何を考えているのでしょうか？

その透き通るような目からは、なかなか判断出来ません。ただ寂しかったのかな？ なるべく傍にいようと思っています。

起きている時は、大抵体を動かしているようです。

その小さい手足をめいっぱい使い、部屋の中を動きまわっています。体を動かすことが大好きなのかな？

でも、変な所に行こうとはしないし、危ないこともやらないし……もちろん、危険物なんて排除済みですが。

母さんには、手のかからない子だつて言われていました。

他の子を知らないので、ボクには判断出来ません。

ですが、時々こちらの言葉を理解しているような素振りを見せます。

やつぱり、ボクの弟はす「」いのかもしれない。

「サスケ、ほら、じつちにおいで？」

そいつひとつ、弟は満面の笑みを浮かべて、一生懸命近付いてきます。そのままボクに、よじ登るかのように抱きついてくるのが、たまらなく可愛いです。

ああ、たぶん今、壮絶に頬が緩んでいるんだろうな。

そのふにふにのまっぺを、心行く迄堪能出来る幸せを噛みしめつつ

……

そんなんある日、部屋で大人しく寝てると思つていた弟が、行方不明になりました。

ボクが外出している間に……この時は本氣で心臓が止まるかと……昼間つから屋敷に侵入する者なんていないだろうし、大事ないとは思つていましたが。

心配するなというほうが無理ですよね？

あんな可愛い弟を見たら、連れて行きたいと思わない人なんていないでしょ。

結論から言つと、ボクの部屋で本に埋まつて寝ているのを発見しました。

どこにも怪我が無さそうで、本当に良かつた……

まだ文字なんて読めないだろうに、何か面白い絵でも見つけたのかな？

今度から、色々見せてみようかな。

それにしても、一人でここまで来れるなんて、すごいなあサスケは。

いつものように、弟の相手をしている時、ふといけりの会話が理解出来ているのでは？ と思つ。

父さんの余話に耳を澄ませるような雰囲気だつたり、語りかけた言葉に、タイミングよく声を上げたり。  
その瞳には、しつかりとした知性が宿つているような気が……いや、  
氣のせいだろうか?

これが俗に言う兄バカと言うものだろうか……バカはいやだな。今度誰かに相談してみよう。

しかし、根は古いのだから、教えればしゃべれるんじゃないだろつか?

「サスケ、いいかい？」おじいちゃんが聞かれて、うなづく。

お・は・し・せ・や・ん  
た・ま・い・

「あうへ、むかしのうへ——いんじ

「頑張れ、もう一度、おにいちゃん、やつぱりダメなのかな？」

卷之三

「……………今、そのそ、だよ、ね？」

「あ、す、い、つ、な、サスケ。」

ふふつ、イタチの愛が通じたのかしらね？」

「…………パパとは言つてくれんのか？…………パパとは…………」

ああ、父さんがちょっと痰田になつてゐる……珍しいな。

#### 4・弟が出来ました。（後書き）

イタチさんには、早々に弟を好きになつてもらいました。

全国一千万のイタチファンの皆様、こんなイタチさんで申し訳ない  
あつ石投げないでつゞめんなさい。

あつい……全身に力が入らないみたい……  
あれ？ “私”は何を……いや、ここどこだっけ？  
どうにも思考が散漫となり、“私”を形作るのがうまくいかないな。  
なんだっけ……歩き回れるよくなつたんだっけ……？  
それにしては体が重い……

「？」

ん？ だれかよんだ……？

なんとか薄く臉を持ち上げることに成功すると、心配そうに誰かが  
覗き込んでいた。

おにいちゃん……なんでここにいるの？  
遠いのにわざわざ会いに来てくれたのかな。

……つてことは、“私”は倒れて入院でもしていたのかな？  
日頃の偏った食生活がマズイのはわかつてたのよ。  
けど、ね？ 料理つて一人分作るのめんどくさいじゃない？

……ゴメンね？ 心配させかけやつて。  
わざわざ来てくれて、ありがとう。  
奥さんや子供はどうしたのかな？  
久しぶりに甥っ子の顔が見たかったのになあ……

”私”もちょっと子供が欲しくなつちゃつた。  
なんだから？  
なんかね、ずいぶん長い夢を見てたみたいなんだ。  
サラツヤ黒髪の可愛い男の子がいいな。

額にひんやりとした何かが乗せられるのを感じる。

あつ気持ちいい……

……あとで……起きれるようになつたら……また……

そう思つと、”私”の意識が拡散していくのを感じた。

弟が倒れた。酷い高熱が続いている。

医者には、体は特に悪いところは無いよつだと言われた。

精神的なストレスが何かから来ている熱だらうという話だつた。

本当に大丈夫なんだろうか？ このまま目覚めなかつたら……最悪のこと想像しそうになり、胸が締め付けられる。

「サスケ？」

早く目覚めてほしい。大丈夫だと言つてほしい。

そう願いを込めて呼び掛けると、微かに瞼が揺れ動くのを捉えた。うつすらと開かれたその瞼の奥に、まつげに隠れた瞳が見える。焦点が合つていなその瞳は、吸い込まれそうなほど、深い色を浮かべていた。

その色を読み取ろうと覗き込むが、すぐに瞼が覆い隠した。

「おにこりゅ……。

……『ぬこ……』

何を謝る必要があるんだろう?~.

高熱に犯される毎どの何かを、この小さな体で抱え込んでいるのだろうか?~?

ボクには話せない事なのだらうか?~。いつか、話してくれるかな

……

いや、今はそんな事より、早く良くなることを祈りう。

すでに効果を成していない額のタオルを替える。

僅かに目尻に浮かぶ涙を、親指の腹でそつと拭う。

そうすると、微かに微笑んだよつた気がした。

……

あれから程なく、"私"の意識も完全回復しました。  
聞いたところによると、心因性の熱だったよつで……

うへん、最近は自分のことも自分で出来るし、かなりストレスは軽減してはるはずなんだけど?

ちょっと"私"向けの娯楽が少ないかな~とは思つけど、そんなことじやないよね~。

思い当たるとすれば……"私"の存在そのものが、なんらかの負担を体に与えてた……くらこかな。

この一年ちょっととの積もりに積もつた負担が一気に噴出したとか?  
でも、こればっかりはどうしようもないよね……”私”は”私”<sup>サスケ</sup>と  
して、しっかりここにいるわけだし。

単純に体に無茶させてた線も捨てきれないけどねえ。

望郷の念に駆られたから……つてのも、倒れる前だと無いかなあ。  
思い通りに動けるように、体鍛えるのに必死だつたから。

余計な事は、あえて考えないようにしてたのよね。

……どっちかといつと、今のほうがひどいかも。  
なんだかおにいちゃんに会つたような気がするのよね……『のせい  
だ』うつけど……

よく考えてみると、未だに最後の時が思い出せないのよね。  
何かの事故とか、病気とか、明確にはつきりと終わつた自覚があれ  
ばまた違うんだろうけど。  
もしかしたら、あつちの体もちゃんと生きてるのかもしれないじゃ  
ない?

精神だけ迷子になつてるとか。

でも、そうなると……”私”と”サスケ”がいるべきなような  
……。

ああ、なんだか沈んでいくのがわかるわ……  
ちょっとこれは、自分ではどうしようもないかなあ。

……ほつとけば、そのうちなんとかなる。かな?

”私”が元氣無いせいが、イタチ君が頻繁に外に連れ出してくれる

よつになりました。

心配かけて申し訳ない気持ちを抱きつつ、体鍛える絶好の機会なので、田一杯走つたり。

「うやつてちよこちよこ出歩いてくると、そのつり一人でお散歩行くのも違和感無くなるかなあ？」

たまにね、ふと視線を感じてイタチ君を見上げた時とか、なんとも表現しがたい田で見てる時があるよね。

何か言いたいことでもあるのかな？

悩み事ならお姉さんが聞いてあげるよ……？

「にいちゃ？ なあに？」

「ん？ サスケは今日も元気だね～って思つてたんだよ。

あ、お土産にオヤツ買つていこ「うか」

おっやつうー！ すううこーつ！ ああイタチ君ありがとー！

仕方ないから騙されときますよ～？

けつして甘味処にツラレタわけじやないよ？

## 5・熱（後書き）

イタチさんが、”私”にとっての兄になるのはこいつの1回目でしょう…

## 6・出会い

清々しい朝の空気を、田一杯吸い込む。昨夜は知らない間に雨でも降ったのか、昨日より空気がひんやりしている。

以前の体は、朝にめっぽう弱かったのに、今では早朝散歩が日課になつた。

もちろん、いつもはイタチ君も一緒にですよ？

今日は、迎えに行くから先に行つておいでとのこと。

ここ一年ほどは、体力作りや、体の動かし方に重点を置いている。本格的な武術っぽい何かは、もつと体が出来てからのほうがいいみたい。

軽くお遊び程度には教えてもらつたけどね？

さすがにリーチが短すぎて、相手にならなかつたわ。それにしても、やればやるだけ動きやすくなるとか、子供つてすごいよね。

術のほうは……実は、以前イタチ君が色々読ませてくれたので、それなりに知つてたりする。

読めてるとは思つてないんだろうなあ～ あれはきっと、絵本変わりだつたんだろ？ ねえ……

まあ、知つてもまだまだ使えないんだけどね？ あれです、何事も基礎訓練が重要つてことですよ。

あれこれ悩んでた例の精神だけど、結局わかりませんでした。

もう悩むのも疲れたので、よくゲームで見かけるMPでいいやつて

ね？

そう思つたら、なんとなく把握出来たのがなんとも……”私”のあの悩みは何だつたのかと……

やつぱり、自分が理解出来る概念に置き換えたほうが、噛み砕きやすいのかもしれないね。

思考しつつも足は動いていたよう、いつの間にか森の近くまで来ていた。

今日は一段と森の縁が濃い気がする。  
いつもはこの辺で体を動かすのだが、今日は一人だからか、どうにもそんな気にならない。

せっかくなので、普段行かない方向へ、のんびりと散策することにした。

花弁に残つた朝露がきらめいて綺麗だなあ……

たまにはことなふうにまよつと過ぎるのもいいかもしないよね。

ふと視線を巡らせると、低い茂みの向こう側で、男の人一人が一人佇んでいるのが目に入った。

こちらに背を向け、どこか遠くを見ているかのよう。  
ちょっとした好奇心に押され、茂みの途切れ目から、彼を見つめる。

僅かに少年を残したまま、青年に変わろうとしている年齢かと思われた。

朝霧と共に消えてしまいそうな、その儂い立ち姿が、”私”を捉えて離さない。

このまま立ち去つた方がいいのだね。

しかし、どうにも体が動こない。  
視線を外すと、幻のように消えてしまつたでも思つてゐるのだろうか？

ふと、彼がこちらに意識を向けたのがわかつた。  
たぶんきっと、最初から気付いてはいたんだろうな。  
立ち去るのとしないのが、気になつたのかもしれない。

彼の視線と、”私”のそれが絡み合つた。  
その瞬間、鼓動が跳ねあがるのがわかつた。

”私”は、いま、どうして、このカラダなんだろう……

今まで感じたことのない、ひどい焦燥感に振り回されそうになる。  
そう、あの人はきっと、”私”にとつて……

「だいじょ‘‘うふ？」

どうやって声をかけよつかと迷つてゐると、言葉が勝手にこぼれ落ちていた。

そつと近付き、両手をのばしてみる。  
ああ、この体じゃ足にしか届かないよ……  
なんとも言えないもどかしさが込み上ってきた。  
もしかして”私”的が、泣きだしそうな顔をしてゐるんじゃないだろうか？

「ありがとう。大丈夫だよ」

そう言って、彼はそつと抱き上げてくれた。

うわっと、役得？ 子供の特権！？

やばい、にやけそうだわ。子供らしい笑顔をしないと……にへらつ

……これでどうかな？

うん、大丈夫そうだ。彼もちよつと笑つてくれた。

先程までの焦燥感はなかつたかのように、気持ちがふわふわしている。

まったく、”私”も大概げんきんなものだ……

「ぼくは、サスケ。うちはサスケ。きみは？」

「はたけカカシ。……よろしくね？」

「カカシくん。うん、よろしくね」

そう言つて微笑むと、彼も柔らかく微笑み返してくれた。

彼の銀髪が、朝日に透けてキラキラと輝いている。

その揺れる輝きから、彼の瞳から、目が離せなくなる。

「ぼくが、そばにいるよ。だから、げんきだして？」

少しでも、その悲しみが癒されますよ！」

そう願いつつ、田尻にキスを落とした。

……「うん、その鼻と口覆つたマスク、邪魔だよ？」

「サスケ……何してるので？」

「あっ、『じりぢや』……」

今まで聞いたどの声よりも、凍るような寒気を感じた気がするんだけど……

「えっとね、ぼくの、初めての、おともだちだよ。」

そう言って見上げる”私”に顎きを返し、彼はゆっくりと地面におろしてくれた。

どうやら紛れのお友達認定は、なんだかつまへいつたみたい？

「……『じりぢや』？」

やましいことはこれっぽっちもないんだよー？ たぶんきっと……

だから、ね？ その極寒の冷氣抑えてください

この後、帰宅するまで必死でなだめ、最終的にはほっぺにキスで落ち着いた……これで機嫌直るかな？

## 6・出会い（後書き）

自分の語彙の貧弱っぷりに泣きたうです。  
ちょっとでも何かがでてればいいなあ

あれから数ヶ月、あの幼い子供とは、幾度かこの場所で会つた。特に何があるわけでもなく、碑があるだけのこの場所に、何が面白くて来るのか……

わざわざ、オレに会つためだけに来ているのだろうか？ だとすると、あの言葉は本気で受けとめなことな……。

あの子は、ここにいる時にはほとんど喋らないとしない。

会話を振れば、たどたどしく話すとするが、それも必要最低限で終わる。

この場所の意味が理解できる年齢とも思えないが、周囲の空氣からか、オレの雰囲気からか。何かを感じているのだろう。

……その沈黙が、正直ありがたい。ここで子供と遊ぶ気分にはなれない。

だが、最近は、ただそこにはいるだけの、その姿に和むのも事実だ。幼い子供特有の、少し高い体温に、なぜか安心感を覚える。頭を撫でた時の、その無邪気な微笑みは、いつまでも見ていたくなる。

そう言えば、最初の出会いから不思議な子供だった。

大丈夫かと聞きながらも、何かにひどく傷ついているような。慰めようと抱き上げると、逆にこちらが慰められたな……くすつまさかあんなふうに慰められるとはねえ。

## カサツ

下草を踏みしめる音が響いた。

今日は、過去に想いを馳せる前に、あの子が来たようだ。

振り向くと、碑を見つめる姿が田に入る。

どこか透明感のあるその瞳の奥で、いったい何を考えているのだろうか？

オレが見ていることに気付く、いつものように近づくまで来て止む。  
このままこの穏やかな沈黙を楽しむのもいいが……

「サスケ、今日は時間があるけど、どこに行きたい所はあるかい？」

たまにはゆっくりと話をしてみるのもいいかもしれない。  
この、どこか謎めいた存在を知りたい欲求に駆られる。

「んひとつ……このとどが、みわたせるところ、いきたいかも？」

「ちょっと遠くなるけど、大丈夫かな？」

「ああ、お兄さんは今日は迎えに来るのかな。言つておかなこと、  
行き違いになるね」

「じゃあ、つむぎよひてから、つれてつてください」

「了解。じゃあ行こつか」

その小さな手を繋ぎ、ゆっくりと歩を出す。

また、たまにはこういつのものもいんじゃないかな?

「ねえカカシくん。」のせとの、たてものつい、おもしろいね。しゅるいが色々、いっぴこまわって」

また畠田っこいとを叫ぶねえ。普通はそんな事思わないとおもうよ?」

カカシ君と会いつてから、あくまでもこの慰靈碑まで行くよつになつた。

まあ、行つてもいないことが多いんだけどね。

それでも、カカシ君と会える場所が他に思いつかないんだから仕方ない。

なんたつて、”私”とカカシ君の接点なんて、今の時期はほとんど無いもんね。

たまには会つて、印象付けとかないと、こんなひつひつ子なんですが忘れちやうよね?

ほんと、なんで”私”は子供なんだろうか……

いつものよつに、慰靈碑のある広場に行くと、今日はカカシ君に会えた。

相変わらず複雑な顔して立つてゐなあ。

”私”の知り合いは、幸いなことに、まだここに刻まれてないけど。

出来れば、今後も、誰も刻まれないといいんだけど……たぶんきっと、夢で終わるんだろうな……。

いつもは、イタチ君が迎えに来るか、カカシ君が家まで送ってくれるんだけど、どうやら今日は一緒にお出かけが出来るみたいですよ？せつかくなので、里が一望してみたいと言つてみました。

なんだか無駄にテンション上がつて、色々話したよつた氣もするけど。

はしゃがすぎたのか、景色を堪能する頃には、疲れ果てちゃつて……結局だつこられて帰つて来ました／＼

もひ、今日の思い出は全部吹つ飛んじゃつたよ。強烈過ぎます。ちっちやくてよかったです！？

## 6・X それから（後書き）

カカシさんには、どこに行けば会えるんでしょうね?  
あとは病院の印象ぐらいしか。。。。

トスツ トスツ

静寂な森に、何かが刺さる音が響く。

「ふう……」

もう何時間になるだろ？

男子が一人、小振りなクナイをひたすら投げ続けている。

「さすがに、つかれた、なつと」

最後の一本を投げ終わる。

手元のクナイが無くなつたことから、休憩に入るよ？

うーん、結構命中率は上がつてきたかなあ。

やつぱり昔やつたダーツと全然飛び方が違うね。こいつのほうが楽しいかも？

ちょっと左手でも投げれたらカッコイイかなあ？

それにしても、拾いに行くのがめんどくさいよね……

的外して森の奥にまで行つちゃうと、見つからないこともあるしね。

むう……引き寄せたり出来ないものかなあ？

運動した後の熱を冷ましつつ、ふらふらと思考を彷徨わせる。

そういうじていると、背後から聞き慣れた足音が近付いてきた。

「サスケ？ そろそろ終わりかな？ 母さんに頼まれた物買つて帰ろうか。

そういえば色々と気の早い匂合が出てたよ

あれ? いつちってお祭りなんてあつたつけ……?

「ん、今日つて何かあるの?」

「ああ、サスケには言つてなかつたかな?」

長らく緊張状態だつた雲隠れの里とね、同盟を組むんだよ。その代表が、そろそろ里入りするんじやないかな?」

……同盟……なんだろう、何かが引っかかる。

同盟つて砂とじやなかつた? いやいや、それはもつと後だつて。他に同盟組んでたんだ……こんなちつちやい頃に。

……ん、ちつちやい頃……? あつ、ひなた誘拐事件つ!?

あれつて確かに、どつかとの同盟イベントで起きたんじやなかつたつ

ひなたがちつちやい頃に、誘拐されかけたとしか覚えてないけど。確か当日じやなかつたとは思うけど……ああ、思い出せない。

”私”が知つてる結果になるとは限らないし、もしかしたらひなたが……

うあ……どうしよう……

”私”一人じゃ止められないし。いや、そもそも止められるほど強くないし。

誰かにお願いするしかないか。 ”私”がお願い出来る相手なんて、限られてるけど。

「兄さん、聞いてほしいことがあるんだ」

「なんだい? あらたまつて」

そう言つと、サスケは思案氣な表情で軽く俯く。

でも、相手は成功させる為に、かなり強い人が来るよね。怪我しない保証なんて無い。

手を出さなくとも、ひなたは生き残る可能性が高い……いや、でも。ここで話しか無いと、”私”が後悔する。うん、非常に利口的だけね。わかつて。

……「ermenねイタチ君。キミに頼ることしか出来なくて。

「その雲隠れの里？って、信用できるの？

これつてさ、他里に無傷で最強部隊を送り込む、絶好の機会にならない？」

「……送り込めたとして、同盟を組む直前だ。人数も限られてる。どうにも出来ないよ？

それとも、サスケには何か見えてるのかな？」

面白いことを言つ。イタチは熟考しているサスケをじつと見つめる。そんな視線に気付かず、思考に没頭する。

答えがわかっているだけに、そこに辿り着く話をうまく作り上げるのが、結構難解な作業となつた。

「まず、精銳とはいえ、少人数での戦争は難しいと思う。火影様暗殺を狙つことも無いかもしない。さすがに、上の警護はしつかりしてるだろしね。……でも、何かを盗むことは可能じゃないかなつて思うんだ。

ねえ兄さん。写輪眼つて強くて貴重なんだよね？ もちろん日向の白眼も。それこそ喉から手が出るほど……

今、木ノ葉の中はさ、ちょっと浮かれすぎてると思つんだ。

同盟自体はおめでたいからいいんだけど」

それを聞いたイタチは、いつになく真剣な表情となる。

これはほんとにあのサスケだろうか？ いつもは柔らかい雰囲気に包まれているというのに。

普段よりやけに大人びて見える。

そう言えば、今まで稀にこういう雰囲気を見せていたか……

「サスケ、きみは……いや、そうだね。可能性はあるな。

大人を拉致するのは難しいけど、前線に出る前の子供なら……

これは、ボク一人の手には余るかな。仕方ない、あのを巻き込もう

「なにも起きなかつたら、ぼくが怒られるだけだよね？」

「大丈夫。その時は一緒に怒られてあげるよ。

サスケは今回の件、大人しくしているんだよ？」

「……うん。ぼくもお手伝いしたいけど、自分が出来る」とは限られてるって知ってるから。

兄さん、気をつけてね？」

大丈夫と言いつつ、サスケの黒髪をかき乱す。

イタチ君……”私”も頭撫でたいんだけどなあ？

言うだけは言つたし、あとは無事に終わることを祈るしか無いか。  
もつと”私”に力があれば、お手伝い出来たのに……

今まま動くと、”私”がターゲットになるかもしれないしね。  
出来ることの見極めは、間違えないようにしないと。

とある評判の良い甘味処。そこには、結構長い時間悩んでいる人影が一人。

その外見は、いかにも怪しく、この店にはそぐわない。

「カカシさん……何をしているんですか？」

「うん？ ああ、ちょうど良かつた。今日は新作が一個もあるんだよ。この抹茶風味のとか、美味しいそうだと思わないかい？ でも、もう一個も捨てがたいんだよねえ。

あの子はどうちが好きだとと思う？」

「……両方持つていけば喜ぶんじゃないですか？ それより、お話があるんですが」

「ちょっと待つてて、場所変えよ！」

そう言つと、先程から見つめていた菓子を買つため、いそいそと店の奥へと消えていった。

カカシの家が近かつたため、場所を移してサスケの考えを伝える。男の一人暮らしなのに、意外と綺麗にしているようだ。

「そう、あの子がそんな事をね……

わかつた。上には注意を促してくれよ。なんせ、今回の同盟の意図が読めないからね。厄介ことは勘弁してほしいよね～ほんと」

そう言つて、手の中の湯呑みを弄ぶ。

「彼らの帰る直前が危険でしょ？ ね。素直に帰ると告げていいの？」

帰る保証はありませんが。

しつかり監視して下さいね？ サスケも狙われている可能性があるんですから」

「……キミも十分候補なんじゃないの？」

「サスケの所に行かれるより、私の所に来る方がましです。  
……守ってくださいね？ 期待しますよ」

そう言って意味ありげに微笑みかけた。

イタチ君が怪我すると、あの子が泣くからね……ほんと怖い笑顔だ  
よ。

## 7・田向事件 1(後書き)

色々悩んで難産でした。

書きたかったのは甘味処のくだりですが  
田向事件って結局いつなんでしょうか?

イタチさんへの説明開始のくだりを修正

その日、木の葉の里は朝から賑わっていた。  
里の人々は、同盟締結といつこの良き日を祝して、思いおもいに楽しんでいる。

大通りに目を向けると、左右に並ぶ大勢の忍達。  
どこからともなく、微かに紙吹雪も舞っているのが見える。  
さすがにこぢらは緊張を隠せない模様。

彼らに好奇の目を向けられているのは、通りの中心を歩く一人の男性。

その堂々とした体躯を晒し、軽く手を降りつつ歩みを進める。

周囲の大人達に視界を遮られながらも、”私”は観察を続けた。

あれが雲の代表か……片目を隠しているのは、カカシ君と一緒にね。  
まあ、人相はかなり悪く見えるかなあ。髭面だし？  
うーん、ちょっと怖いかも……先入観のせいかな？

後ろの一人は、優しそうな表情をしている。

どこにでもいそうな顔立ちだなあ……人混みに紛れたら、違和感無く溶け込みそう。

優しそうだからと言つて、甘く見ないようにしないとね。

通りを歩いていた彼らが視界から消え、程なくして、左右に並んでいた人々も散会する。

あとは、会場で調印が終わるのを待つのみとなつた。

「さて、ボクらは中に入れないから帰ろうつか。

サスケ、わかってるよね？」

「うん、兄さん。気を付けるよ。あ、帰る前にちょっとだけ寄り道してもいいかな？」

昨日カカシくんが持ってきてくれたおやつ、美味しかったんだあ～今度は兄さんと食べようと思つて。どうかな？」

今日からの数日間に思いを馳せつつも、おやつは別だよねと一人思うのだった。

あたりが闇に沈み、日付が変わろうとする頃。

昼間の晴天が嘘のように、薄く広がった雲に月が隠される。他より僅かに高い建物の影、その周囲の闇よりなお暗い影で、微かに身動ぐ者達がいた。

程なくしてもう一人、その影に近付く者がいる。

「ちつ……やけに警備が厳重だな。昼間は浮かれていたのによ」

「監視の目を誤魔化すのにも、手間がかかりましたしね」

「このまま進めるか？」

「いや、そうだな……」

何事か囁き、頷くのを確認すると、彼らは僅かな痕跡も残さず、その場を立ち去つた。

コトツ

静かな室内に、僅かな音が響いた気がした。

睡魔に侵されていた”私”の意識が、ゆっくりと浮上する。

イタチ君が帰ってきたのかな？

ひなたは大丈夫だったかな？

うん、帰ってきたことは、大丈夫だったことかも。  
もしかしたら、今日は事件が起きなかつたとか？

これは相談して正解だつたっぽいかな。よかつたあ。

「兄さん？

おかえりなさい？」

寝起きの思考を引きずり、眠氣を宿した目を瞬きつつ、部屋の入り口を引き開ける。

その目に飛び込んできたのは、想定より大きな人影が一人。  
マスクに覆われた顔からは、表情を一切覗うことが出来ない。

徐ろに伸ばされる手を認識し、急激に警鐘が鳴らされるのを感じる。

……まずいっ！

思つたと同時に、後ろに飛び退る。

だが、先程までの睡魔が邪魔をし、僅かに動作が遅れた。

その隙を逃さないかのように、人影から何かの力を感じた。

何をされた……？

外傷は特に無いようだけど。

隠し持っていたクナイを引き抜き、相手に向ける。

視線を相手から逸らさず、時間稼ぎを模索するも、徐々に”私”的意識が薄れしていく。

……ああ、ダメだ。無防備に受け過ぎた……これは落ちるかも……ごめんなさい、ふたりとも……

人を眠らせる術か何かだろうか。

程なくして、抵抗むなしく、”私”的意識が闇に沈むのがわかつた。その意思の消え行く瞳には、雲の隙間から覗く月と、その月光に照らされる銀色が写っていた……

## 8・田向事件 2(後書き)

難産その2。

着地点がどんどんズレていきます。おかしいなあ。

日向の屋敷方に張つた網に、奴等がかかつた。

まさか、本当にあの子の読みが当たるとはね……

あつちの人間にも、それとなく情報を流しておいて正解だつたな。ヒアシさんに情報源を探られなくてよかつたよ。まさかあの子の名前を出すわけにはいかないからね。

それにしても、あの子はまだ三歳だつたか……

改めて考えると、とてもじやないが、歳相応には思えないな。

普段の何気ない仕草も、どこか落ち着きを感じる。

あの年齢は、もっとわがままで、手がかかるものではないのか？

そう言えど、言葉はどことなく選んでいるよつな節がある。不意をつくと、本当のあの子が見える気がするが、本人は気付いているだろ？

ま、あれに気付いているのは、オレとイタチ君くらいなものでしょ。あの子は、意外と交友範囲が狭いからね……

つと、まだまだ気を抜くには早いな。さて、犯人の顔を拝みますか。

日向宋家の屋敷に着くと、庭の一角に僅かな人集りが出来ていた。

「ほんばんわ、ヒアシさん。襲撃があつたとお聞きしましたが」

「ああ、キミか。情報感謝するよ。おかげでヒナタは無事だ」

「それで？ 侵入者は……あそこの一 人だけですか？」

「そうだ。あそこに転がっているやつだけだ」

拘束されて、地面に転がされている侵入者を見つめる。

マスクで顔を覆っていたようだが、それもすでに剥ぎ取られている。それなりに抵抗したのか、血が目立つが、まだ息はあるようだ。

こいつは確か……例の忍頭のお供として来たやつか。腕がたつとは思っていたが、まさか一人でやるとは。

その姿に、なぜか違和感を感じた。

……いや、あの子の話からすると、単独犯とは思わない方がいい。それに、来るとしたら、あの忍頭だろう。とすると……これは陽動か？

狙いはどういちだ？

嫌な胸騒ぎがする……

「犯人はこちらで引き取ります。よろしいですか？」

後方から、暗部の一人が声をかけてきた。

かなり助かった。オレには事後処理をしている余裕が持てない。

「すまない。任せるよ。死なせない様にね。

ヒア・シさんも、それでよろしいですね？」

「そうだな、特に問題は無い」

「これで終わりとは限りません。引き続き警戒お願いしますよ。オレは、うちは見てきます」

そう言い捨てると、焦る気持ちを抑えつつ、全力でうちはに向かった。

民家の屋根を伝いながら、最短距離で突き進む。

やつらは三人で里に来ていた。

一人が日向で陽動に動いた。残るは一人か。警戒が厳しくなった日向を狙うか、それとも……サスケ、無事でいてくれつ

うちはの屋敷が見えてきた。その周囲を取り囲む塀に立ち、中の様子を覗う。

警備が若干薄い気がした。ここに来るまで、イタチ君に会つていない。

……いつたい何があつた？

サスケの無事を確認する為、部屋の場所へ移動する。その部屋の前に佇む、不審な人影が目に飛び込む。それと同時に、崩れ落ちるサスケと視線が絡んだ。

くつ……間に合えつ！

最大限に殺氣を込め、二人の間にクナイを投擲する。

弾かれたように飛び退る敵を睨みつつ、サスケを背後にかばう」とに成功する。

そのまま視線を逸らさず、サスケの状態を探る。

外傷は無いようだな。呼氣にも不自然さは無い。眠られたか……？

「こ)のままサスケを拉致するのを、黙つて見てると思しますか？  
雲の忍頭さん」

そう言って、おもむろに左目にかかる額当てをずらす。  
そこからは、紋様の浮かんだ真つ赤な目が覗く。

「ち……おまえは……」

僅かに敵の気配が乱れるのを感じた。

やつもそこまで馬鹿じゃないはず。一瞬で決着のつく相手なら、殺して拉致遂行もありえるが。  
殺人が任務ではないのだ。拉致なんて、対象を確保する前に発覚した時点で、失敗が目に見えている。

「……どこから漏れた？」

「ただの可能性の問題ですよ。あなた達は、力の収集に貪欲すぎた」

それにしては、開眼していないあの子を狙つたのが腑に落ちないな。まさか、写輪眼自体ではなく、その血が狙いか……いやな話だ。気の長い話もあるが。

「それより、時間はオレの味方ですよ？」

……それとも、一瞬でオレを排除してみますか？」

そう、秒単位で味方しているのだよ。

あとは、幻術で気を逸らせて……よし、かかったか。長くは持たないだろうが、十分だ。

ゴッ

直後に、何かを殴りつけるような音と共に、敵が庭先に吹つ飛ぶのが見えた。

あとには、小柄な人影が一人。

あれは側頭部に綺麗に入ったな……やつの意識も飛んでるんじゃないか？

その振り上げた足を下ろし、転がった敵に駆け寄る。

そのまま印を組めないよう、無造作に右手、左手と潰していく。顔面を覆うマスクを剥がし、その顔を確認すると、猿轡さるくつわを噛ませて拘束する。

「ないすタイミング。イタチ君。

それにしても、あの子絡みは相変わらず容赦ないねえ」

「腕の立つ忍を拘束するんです。しかたないですよ」

ま、あつちは任せといて大丈夫か。  
イタチ君が遅れた理由も想像が付く。ここには忍頭一人しかいない  
からな。

それよりもあの子は……

ふう、やっぱり外傷は無いな。よかつた。

倒れた体を抱き起こし、その様子を伺う。

精神に作用する封印系の術か……そんなに強くないが。解

程なくして、その手の中の体が身動きした。

「んつ……うつ……おにいちゃん……？」

……」こんな安心しきった甘えた声は、初めて聞く。

その少しの遠慮も含まれない無防備な声に、心がざわつくのを感じ  
る。

しかし、イタチ君をこんなふうに呼んでいるのを、聞いたことはな  
いが。

この子はいつも、人に氣を使い過ぎるからな。距離を感じるとい  
うか……

「……あつ、カカシくん……あいつは？」

先程までの危機を思い出したのか、その体が強張るのを感じた。

「もつ大丈夫。今頃イタチ君に簾巻きにされたるんじゃないかな?」

そう言つと、安心したのか、少し体の力が抜けたようだ。

その瞳を見つめていると、視線が揺れ、潤んでくるのが見えた。

目尻の涙が、今にも零れ落ちそうだ。

男の子の涙を見るもんじやないな。

オレの胸で悪いが……

そう思い、その小さな体を抱きしめる。

腕の中の体は、肩を震わせ、声を押し殺して静かに泣いていた……

## 9・田舎事件 3（後書き）

戦闘描写？ナーニソレ？オイシイノ？  
はい、こんなんですみません。  
もーと私に中二病が降臨してくれればいいやもひょんとじょあんなに

おはようございます。”私”です。

例の日向事件は、誰も死ぬこと無く、朝を迎えたようです。  
朝起きると、ちょっと心配そうな顔をしたイタチ君が教えてくれました。

犯人も捕えられ、上の人が雲との取引に使つことでしょう。  
同盟締結直後ですから、どんな取引になるやら……まあ、私の耳には入らないのでしょうか。ちょっと残念です。

”私”としましては、今回の自分の発言が、ここまで歪みが生じるものだとは思つていませんでした……  
ええ、色々認識が甘かつたと申しましょうか。

イタチ君へは、写輪眼も危険だよつて説明しましたが、”私”の中では、これはあくまで”日向事件”なわけです……  
どこかで、ヒナタさえ誘拐されなかつたら、無事終わる話だと思つてたんです。

そう、本気でターゲットをサスケに変更するとはね。

これは”私”の知つている物語ではない。そう強く認識しました。  
あの話は、あくまでも数ある可能性の一つを選び取り、描き出して  
いるに過ぎないと。

世界は同じでも、”私”が存在する為に、選び取らなかつた可能性  
に進むこともある。

もちろん、あの物語の通りに進むこともある。

今この世界は動いている。そういうものなのだと。  
そして、”私”は今、この世界に生きている……

”私”を狙った意味……カカシ君がオブラーートに包みに包んだ話をイタチ君にしていました。その可能性もあるって話だつたけど。  
うん、ごめんね。聞いちゃつた。

そういう意味なら、ヒナタよりサスケかもね。  
三歳という年齢を考えると、うまくいくと洗脳できるおまけ付きだもんね？

こんな所で真操の危機を感じるとはねつ！ なにそれこわいっ！  
それ以前に、女人をそういう相手には思えないと……いや、でも、  
どうなのかな？

実際そうなつてみないと、どうなるかなんて保証は無いか。  
男の体はまだ正直わかんないし……そこまで成長してないしね？

それにも、あの時はほんと怖かった。  
男の人の手を、そこまで怖いと思つたことは今まで無かつたよ。  
そして、躊躇なくクナイを向けている自分もね。  
想像力が足りない子供じゃないんだ。あれはれつきとした武器なんだ。

”私”も、知らない間にこの世界に馴染んできただつてこと、なのかな……？

気が付いたら、しつかりカカシ君の腕の中だつたわけだけど……  
不意打ち過ぎて、思わず固まっちゃつたけどね？  
近いっ！ 近いよカカシ君っ！

あまりの近さに赤面しそうになるのを必死で抑えてたから、拳動不審になつてなかつたかな。

おまけにその胸で泣いちゃつたし……『安堵と羞恥と嬉しさと。ほんと色々抑えるのに必死でしたよ。

……ああもうつ今思い出しても恥ずかしそぎる——  
くうつ……どうしてくれようかつ

……つと、若干思考が脱線したけども。

今回、”私”は結局守られた。

敵を退けることはもちろん、逃げることさえ出来なかつた。ただただ眠らされ、敵の手に落ちかけた……

この世界はそんなに優しい世界じゃない。”私”<sup>サスケ</sup>の立場が、力無いことを許さない。

知つてはいたけど、理解してはいなかつた。

そう、もつと力が欲しい。

誰よりも強くなくていい。

ただ、大好きな存在を守れるだけの。

大好きな人が泣かないよう、自分を生かせるだけの力が……。

10 ·&quot;私&quot;と世界(後書き)

9 ·5くらいのお話

## 11・友達を作ろう

あの幼児誘拐未遂事件からはや数日。

太陽は柔らかい光を投げ掛ける。

里の中は、何事もなかつたかのように、穏やかな雰囲気をまとっている。

そもそもそのはず、あの事件は、極秘扱いとなつてゐるのだから。

隣には、難しい顔をしつつ歩く弟がいる。

弟は、あの事件から少し変わつたようだ。

気が付くと、今まで以上に考え込んでゐる様子が伺える。

遊び……と言うより、あれは修行だな。それらにも、より積極的になつた。

やはり、あの事件は、それだけ弟に傷をつけたのか……

先日、力カシさんに指摘されて改めて思つたが、弟の友達が少ないのが気にかかる。

確かに、弟が友達だと言つてゐるのは、あの人以外に聞いたことがない。

さすがに年齢が離れすぎでいるとは思つが……

一応あの人も大人だ。弟の思いを無下にはすまい。

まあ、何かあつた時には……ふふつ。それはその時考えようか。

今までにも、幾度か弟を連れて、子供達のいそがしい場所に行つてみた。

だが、そのいずれの場合も、遊びに混ざるひつとはしない。

ただの人見知り……と言つわけでも無さそうだ。

微笑ましそうに見つては、そのまま立ち去つてゐる。

どつにも精神が早熟なよつだ。

今向かつている家の子供達と、馴染んでくれればいいのだが。あそこの家も特殊だから、悩みを同じくすることもあるだろ。ひ。

のんびり歩いて行くと、遠くに大きな屋敷が見えた。  
今日行くことは伝えてあるはずだが、さて……

久しぶりに、イタチ君とまつたりのんびりテートなのですよ～  
と言つても、メインはこのでっかい屋敷にご挨拶。  
うちはの屋敷も大きいけど、こっちも迷子になりそつなくらい広い  
かも。

イタチ君が取り次ぎをお願いし、暫し庭を堪能する。  
うん、いいねこつこつ庭。どこか懐かしい感じがする。

あの奥にあるのは、道場かな？ やっぱり道場もおつきそつだ。

「やあ、いらっしゃい。先日はお互に災難だったね」  
「突然の訪問すみません。お互に無事でよかったです。でも、その  
話はここまででお願いします。

サスケ、こっちにおいで」

あ、来たよつだね。このちよつと厳つい人がヒアシさんかな？  
で、もう一人が、えつと……ヒザシさん……だつたかな？  
もう、双子だし名前も似てるし、わからなくなるつ  
ヒナタばばとネジばばでいいや。

「初めまして。『ひな』はサスケです。よろしくお願ひします」

「『ひな』、キミがサスケ君か。私は日向ヒアシだ。

娘と同年代くらいかな？ 仲良くしてやつてくれ

そつぱりと、隣に隠れるよつて立つていた女の子を促す。

「日向、ヒナタです。よつ……よろしくお願ひします」

「うわあ……かつ 可愛い！ どうしようつ！ ちびつこヒナタとか  
破壊力ありすぎじゃないですか！？」

「ひ、撫で回したくなるねつ！ あ、危険な意味じゃないよ。  
でも落ち着け”私”。今は男の子なんだ。親の前でそんなことやつ  
ちゃダメ。

「可愛いねヒナタちゃん。よろしく」

笑顔を向けつつ、その頭にぽんと手を乗せ撫でると、真つ赤になつ  
てヒナタぱぱに隠れちやつた……あれ、おかしいなあ……？

「ほほつ、小さいのになかなかやるねえ。  
つちの息子とも仲良くしてやつてくれ」

「日向ネジです。よろしく」

おつとネジ君だ。

やつぱりあの事件が無事終わつたから、大丈夫そうだね。よかつた  
あ～

「よろしく、ネジくん」

「ネジでいい」

「つと……」

えつとしまつた、同世代にほくつてびうよ。それそろ卒業しとくかな?

私は、なんだか紛らわしいから、というか、色々微妙だから。素が出そうで怖いし。

残るはやつぱり俺……?

「……あ、じめん。じゃ、俺もサスケでいいよ。

ネジは、体動かすの好きなほう?」

「そうだね。よく父さんに手合わせしてもらつてるよ」

うんうん、やつぱりネジ君に修行相手お願いしようかな。あ。そろそろ相手が欲しかったんだよね~一人だと煮詰まる」ともあるし。

イタチ君も力カシ君も、暇な人じゃないしねえ……

「じゃ、今度俺ともやうつよ。あ、でも痛いのは勘弁してね?」

田向の屋敷からの帰り道、なんだか弟が嬉しそうだ。あの、ネジという男の子が気に入つたらしい。たぶん、修行相手になりそうだとでも思つたのだろう……まあ、そこから親しくなればいい。

それでも、俺、か。ふふつ見栄を張つちやつて。可愛いなあ。

今日は連れて行つてよかつたな。

だけど……あの頭撫でる癖はやめさせたほうがいいな……

## 1.1・友達を作りつ（後書き）

友達作らないなら無理にでも会わせてしまえ?  
イタチさん、苦労様です。

## 12・早く大きくなりたい？

麗らかな春の日差しが降り注ぎ、草木は色とりどりの華で我が身を飾る。

そんな縁側で微睡むのが似合いそうな、とある畳下がり。

キラキラと輝く湖面を眺めつつ、その水面に一人足を乗せる。じつしてここに足を運ぶのも、どれくらいになるのか。

こちらに来てそろそろ4年。だいぶ”私”の常識で推し量れないことに慣れてきた。と思つ。

現在行つているのは、あの話にあつた、チャクラコントロールの修行の一つ。

足の裏からの、程良いチャクラの放出により、水面に立つことが出来る。

夢は夢のままで終わらないんですね。……なんか違う？

まあ、まさか、ホントに実践出来ちゃう日が来るとは思わなかつたけどね……びっくりだわ。

最初なんて、そのまま水泳に強制移行してたんだよねえ～あれは寒かつたなあ。

夏なら泳ぐのもありなんだけど……もひょつと季節選べば良かつたかな……？

そして、足元の水を一掬いし、チャクラを使い、手で弄ぶ。

指の隙間を抜け、手の甲を伝い、手首を一周し、指先に集まる。水とは思えないほど弾力のある、ふるふるとした感触が気持ちいい。

そのまま手を持ち上げると、光を反射し、ゆらゆらと揺れる。

これもコントロールの一環……と言つか、まあ、単なる水遊びなんだけどね？

水つてなんだか触れていたくなるのよね。  
ああ、癒されるわ……。

木登りのほうは、以前からじょじょに試してたけど。  
あれって、別に登らなくてもいいと思うんだ。

片足を幹に付け、微妙な感覚を把握する。それと共に、もう片方を地面から離して、体制を維持する。

まずはそこからだと思うんだよね〜

なんでわざわざ登るのに固執するのかな？ あんまり登ると、失敗した時危険なのにね。

いや、登るというより、歩くことに意味があるのかな。  
まあいいか。もう済んだことだし。

心地良い疲労を感じてきた頃、水面から桟橋に上がる。  
体を伸ばし、軽くストレッチを行い、一息つく。

程良く体が解れた所で、術の練習に入ろうとするが、ふと、思いついたことを試したくなつた。

あの話で、ナルトがやつてたお色気の術。

あれつて、まったく違う人になつてるわけじゃ無かつたと思う。  
自分をベースに成長させて、想像力を上乗せしてる感じかな？  
ナルトのあの完璧な想像力は、いつたいどこで身につけたんだろう

はつ、もしや覗き……？ いやまさかね。

この、思いついてしまつた、早く大きくなりたいという誘惑には、正直勝てる気がしない。

うん、単純に成長するだけだし、大丈夫だよね。

今まで、他の人や猫には変化出来たんだ。やれば出来る。成長出来るなら、あの二人との関係も、また違つたものになるかもしない。

……別にあれをそのまま実践すわけじゃないよ？  
何が悲しくて、痴女にならないといけないのか……あれは“私”にはきっと耐えられない。

この体をベースに、少し年齢を加える。  
とりあえず、10歳ほど追加すればいいだろ？

深呼吸をし、気持ちを落ち着ける。

成長した体を意識し、術を行使する。

いつものように、力が体に纏わり付くのを感じる。

一瞬後には、幼子の姿は焼き消え、しなやかな体躯の少年が立つていた。

……つまくいったかな？

地面との距離が遠い。この距離感はひどく懐かしい。身長は160前後くらいだろつか？

以前の”私”は、高いヒールを履いて、確かにこれくらいだったはず……手足もスラリと長く、程良い筋肉が付いている。自分の体ながら、少し羨ましい。

だが、いきなり昔の自分に近付いた為か、強い違和感を感じる。今まで変化した時には感じなかったから、やはり、この体をベースに成長せている為かと思われる。

ふと、湖面に映る姿を視界に入れ。漆黒の髪が、ふわりと風に揺れる。その姿を見つめ、見つめられ……その強烈なまでの違和感に思考が塗り潰される。

「コレは、ワタシジャナイ……

「うひ……ザモツ、がはつ……ぐひ……」

急激な嘔吐感に、一切抵抗が出来ない。喉を焼く酸味に、無意識に涙が零れる。

少し気管も焼いたか？ 激しい咳き込みが止まらない。

そのまま、くずおれるかのように片膝を付いた。

嘔吐感が収まった頃、すでに術は解けていたようだ。

恐る恐る、湖面に映した姿を確認する。

よかつた……いつもの体だ……。

……なんだか、ちょっと、疲れたかも……今は、何も考えたくないかな……

思考を放棄すると同時に、青空に染まつた静かな水面が近付いてきた……

## 12・早く大きくなりたい？（後書き）

確か湖っぽい何かってありましたよね？  
池だったかな？

焦りはろくなことを生み出さないつと。

そして広くもない室内に、簡素なベッドが一つ。  
その部屋には装飾などなく、無機質な印象を与えていた。

窓からは、柔らかな月光が射し込んでいた。

白い壁に反射し、室内をほのかに照らし出す。

どこか侵しがたい静寂の中、僅かな吐息だけが聞こえる。

ベッドの上には、幼子が一人、穏やかな眠りについていた。  
その吐息が、微かに乱れる。

ふるりと睫毛が揺れ、かたくなに閉じられていた瞼が持ち上がる。

「…………んつ…………あ…………わたしは…………」

その声に誘われたのか、窓際のひときわ暗い影が動く。

「気が付いたかい？」

ベッドのほうへ踏み出した人影が、月の光に照らされ、その輪郭をあらわにする。

どこか幻想的なその光景に、夢見心地な視線を投げかける。

「…………あ、カカシくん…………？  
わたし…………ぼくは、どうして？」

「サスケ、覚えていないのかい？」

「…………キハは湖に落ちて、一日間田覚めなかつたんだよ」

そうして彼は、ベッドの縁に腰掛け、慈しむようにサスケの頬を撫でる。

額にかかる前髪をかき分ける指が、ひどく優しく触れる。

その手が、その声が、”私”の心をざわめかせる。

「あの日、ネジと約束したの忘れてたんだしょ？」

サスケを探してた彼が、湖に落ちるのを両撃してね。助けてくれたんだよ。

キミが忘れてたことに感謝しないとな。結果的に助かった。

あとで、お礼言つんだよ？」

そう言つと、約束を思い出したのか、サスケの視線が揺れ動く。

「……落ちる前、キミの様子がおかしかったって聞いたよ。いつたい、吐くほどどの何があつたんだい？」

サスケの瞳が、苦悩の色に染まる。

ともすれば泣き出しそうな、救いを求めるかのようなその瞳で、しかし、出た答えは謝罪だった。

「「めんなさい……」

「オレには、話せない」と、なのかな？ お兄ちゃんには話せるかい？」

その問にも、ふるふると首を横に振る。

「……わかった。でも、キミがそれに耐えられなくなる前に、ひめんと吐き出すんだよ?」

そう言って、じぽれ落ちた涙を拭う。

微かに頷くのを見て、僅かながら安心する。

「ああ、朝まだ時間がある。もひちよつと寝るといい。キミが起るまで、ここにこるよ……」

ネジの話では、どうやらこの子は、変化した後に吐いていたらしい。大きな術を使用した時には、体に負担がかかることがあるが、変化するぐらいなら子供でも出来る。術自体が原因では無いだろう。

本人は、どうやら何か心当たりがあるようだ。

あんな顔をしつつも、心に秘めなければいけない何かが……

「……私、か」

どこかで子供だと思っていたが、一個人の~~人間~~として向き合えれば……  
そうすれば、この子……いや、彼の悩みも少しほ軽く出来ないだろうか?

傍らで眠るサスケを見ると、先程の苦悩など無かったかのよつて、  
穏やかな寝顔をしていた。

翌朝田覓めると、そこにはもうカカシ君はいなかつた。  
あれは夢かとも思つたが、夢だとは思いたくないので、そつ思つこ  
とにした。

”私”が気が付いたと知られ、色々な人が来てくれた。  
お母様には泣かれ、イタチ君には物言いたげな困つた顔をされ、ネ  
ジ君には盛大に説教された……

うん、ほんとごめんなさい。今度改めて、菓子折り持つてお礼に行  
くから。

あの思い付きは、”私”にとつてのパンドラだつたのかもしれない。  
希望が残つたのかどうか、よくわからないけども。  
いづれはあの姿になる日も来る。その時には、ゆづくじと馴染んで  
いるまぢ……

そう、この手元に残つたもう一つの箱を開けさえしなければ……  
これにはきっと、希望なんて欠片すら入つていない。  
今この世界で、”私”が”私”であるために、永遠に封印しようと  
決意する。

### 13・箱（後書き）

アケチヤダメダアケチヤダメダ…

さて、カカシさんのフィルターを一枚外すことに成功したでしょう  
か？

## 14・水分攝取は忘れずに

突き刺さるような口差しが降り注ぎ、その暴力的な熱で世界を染める。

ときたま室内を過ぎ去る風は、こもつた熱を追い払つには至らない。その広い道場に、荒い息が反響する。

一人の幼子が、床に倒れ、大きく息を乱した。

はふ……床がひんやり気持ちいい……

「なんだサスケ、もう終わりか?」

「むう……ちよつとネジも、休みなよつ」

言葉と同時に、近くに立っていた彼の腕を、強く引く。そのまま寝転んでいるサスケの上に倒れ込みそうになり、腕をついて体制を整える。

目の前にある、床の冷たさに目を細める顔に向け、彼は不敵に笑う。

「なんだお前、まだまだ元気そういうじゃないか。それとも、寝技の練習でもしたいのか?」

「えつ……と、いろんな意味で危険そつだからヤメとく……」

そう言つと、若干視線が泳いだ。

いつもより顔が赤い気がするが、暑さのせいか。

「そつそれより、やつぱりネジには叶わないな。この歳の一年の差を思い知るよ」

「そんなこと言つて、お前はオレの攻撃ほとんど避けてるじゃない

か

「だつて、当たつたら痛いんだもん。相変わらず容赦無いんだもん  
なあ～」

どちらともなく、小さな笑いが零れる。

そのまま一人で、暫し床の冷たさを堪能していると、外から足音が  
近付いてきた。

「ネジ兄さん、サスケくん。お水、持つてきたから……」

開け放した入り口から、ヒナタが顔を見せた。

差し出された水を、一息に飲み干す。

体の隅々まで行き渡るようなその感触に、ずいぶんと長い時間訓練  
していたのかと気付く。

こんな日に水分取らないとか……危なかつたかも？

「ありがとうヒナタ。いつも助かるよ。

道場も長時間占有しちゃったな。今日はもう終わるから、お礼言  
つといてくれるかな？」

じくじくと額ぐ姿に、どこかほんわかした気分になる。  
思わず手が出そうになるが……激しい運動の後には、あまり近付き  
たくない。

ああ、シャワー浴びたい……って言つか……

「あつい……」

「まあ、夏だからなあ

「俺ちゅうと水と戯れてこようと思つんだけど、ネジはびつあるへ。」

「……お前と水とか、悪い印象しかないから監視しに行くよ

「なんだソレは。いや、ほんとその節は申し訳ない……。

えつと、ヒナタはビリする?」

「あつ、わつ、わたしひいですつ。行つてらつしゃいつ

荒てらやつて、やつぱり可愛いなあ~

ヒナタに別れを告げ、ネジ君と一人で湖に向かうことにした。

たわいない会話で、茹だるような暑さを誤魔化しつつ歩を進める。  
こんな日にも、公園には子供が溢れている。  
木陰があるとはいえ、みんな元気なものだ。

ふと視線を向けたその公園に、ぽつかりと空いた一角が見えた。  
そこには、ブランコに腰掛け、一人遊ぶでもなく、周囲の子供たち  
を見つめる姿があった。

その背中は、リストラされた会社員のようこ、どこか哀愁を感じる。

あの黄色い印象の子供は……

「「めんねじ、ちょっと行つてくる。いいかな?」

その一角に目を向けつつ尋ねるが、特に否定も無かつたのでほつと  
する。

子供にあんな皿を任せたままなのは、良くないよね。

「キミ、暑くない？」

なんと声掛けようか迷ったが、思考のほとんどを占めていた言葉が  
出た。

急に声をかけたからか、かなり驚いた表情をしている。

「ああ、なんかこれ完璧にナンパじゃない？『キミ、お茶しない？』  
と同じノリだつたよ……つわ何やつてんだ”私”はつ  
それもこれもきっとこの暑さのせいだよね」

「『じめん、驚かせたかな？俺はサスケ。キミの名前を聞いてもい  
いかな？』

「……うずまき、ナルト」「  
「ナルト……うん。今から水と戯れに行くんだけど、暇なら一緒に  
行かないか？」

「こんな所にいても、茹だるだけだよ」

そう聞いてみると、ちょっと落ち着いたのか、どこか探るような目  
をしながらも頷いてくれた。

このころはまだ大人しいのか。悪戯で自己表現することも無いみたい  
いだしね……

手頃な位置にあつた頭をぽんぽんと軽く叩き、ネジ君のいるほうへ  
促した。

ネジ君が、微妙な表情をしているのに気付く。ナルトに他意がある

83

わけでは無いやうだが。

「うん？ ネジも頭撫でて欲しいのかい？」

「……バカな」と言ってないで、わざわざと行へやつ

おつと置いて行かれそつだ。『めんね、ちよつと運乗りしたかも？』

## 14・水分攝取は忘れずに（後書き）

ナルトの口調つて実は難しいのか。  
といふことに気付く。

それにも暑いです。海…はベタつくから、川に行きたいデス。

夏の日差しを受け、眩しいほどに輝く湖面が広がる。火照った体に、水の冷たさが優しく絡みつく。

水中から見上げる空は、ゆらゆらと揺れ、幻想的な碧を創りだす。

「ふはつ」

水面に顔を出す時の浮遊感は、結構好きだつたりする。ふと、桟橋の縁に腰掛け、こちらを見つめる視線とぶつかる。

「ネジは泳がないの？ あ、もしかして泳げないとか？」

「……お前を見てたんだよ。それに、泳げなかつたら助けれないだろ？」

「ああそだつた……あれば水のせいじゃないよ。大丈夫、俺ちゃんと泳げるから。ありがとう」

少し思案するも、納得したのか、そのまま水に飛び込んだ。

視線を巡らせると、少し離れた所に、金髪の頭が見えた。その顔に軽く手を振る。

ちゃんと泳げるんだ。よかつた……。

まあ、泳げなかつたら教えようと思つてたんだけどね？

それにしても、あの公園の雰囲気は酷かつた……。  
九尾事件は確かにたくさん的人が犠牲になつた。

”私”の知り合いは、当時は家族のみだったから、あまり実感は無いけど。

その原因となつた九尾が、ナルトに封印される。

得体が知れなくて怖いのはわかる。

その原因自体も、骸を晒したわけじゃない。

残された人達の感情の行き場が無くなつてているのもわかる。

でも、たとえそうとしても、こんな小さな子供に向けるような感情じゃなかつた。

子供は周囲を見て育つものだ。

大人達が無視するような、悪意を込めて睨むような、そんな態度だと、子供だって素直に真似る。

そんな態度ばかり取られたら、ナルトだって、自分はそういう存在なんだつて思うじゃないか。

せめて、ほんの少しでも、彼を彼として扱う人間がいれば……

日差しが少し弱まつた頃、岸部の木陰で休憩することにした。服が乾くまでまつたりしつつ、湖からの涼しい風を堪能する。ナルトも、少しあはれが紛れただろうか？

座る位置が若干遠い。遠慮しているのが伺える。

それにも、子供って何して遊んでるんだろうねえ？

まあ、”私”には混ざって遊ぶのは無理だけど。先に牽制しどけばいいか。

「ナルト。俺は子供の遊びはよくわからんから、そういうのには混ざれないけど。

見かけたらいつでも声かけてくれよ？」

「……なんで？ なんでオレを？ 今まで誰も、オレのことなんかつー！」

どこまでも真っ直ぐな目に見据えられる。  
その手は、震えるほどに固く握られていた。

ああ……この子はこんなにも……。

「……ねえナルト。人っていう生き物はね、なかなかその本質を見抜くことは出来ないものなんだよ。

外見に騙され、行動に騙され、取り巻く言葉に騙され、その背負う物に騙されるものなんだ。

俺とネジだつて、お互いを完璧に理解することは出来ない。これは、人が人として生きているなら当然のことなんだよ」

そうやって、静かに、噛み締めるように話をする。

その黒い瞳は、星々を抱いた闇夜のように深く、優しい色をしていた。

「それでも、人は人を大切に思つことが出来る生き物なんだ。  
わからぬから理解しようとする、誠実であるうとする。素敵だ

と思わないかい？」

「でも、オレは、オレこそはそんな事は……」

「まあ、理解出来ない物は怖いからね。生き物は案外臆病でもあるんだ。

知る労力を払わず、知ることによって傷付くことを恐れ、最初から遠ざけるつて場合もあるナビ……

それが全てと思わないで欲しいかな？」

ナルトの、青空を溶かしたような目が、不安気に揺れる。

「俺はね、ナルト。ちゃんとキミのことが知りたいと黙つてこらるよ

やつぱり」と、ナルトの頭をぽんぽんと優しく撫でる。

「ああ、顔がぐひぐひぐひだよ？」

「男の子の涙は貴重なんだ。そんなほいほい見せちゃダメだよ？」

「ほら、おこで」

軽く抱き寄せ、宥めるよつて心中を撫でる。

ネジ君を見ると、優しく頷いてくれた。  
こうじう事を語ったのは初めてだけど、びづやうりなんとか言いたい  
ことは云わつたよつだ。

「ま、女の涙は高いんだだけじゃね……」  
高こうえに怖いんだよ？  
くすり

## 15・人（後書き）

うぐつ…語りはなかなかに難しいデス。

7/6 前半改変。ナルトについて少々追加。ネジ君の独白は胸にしまつてもらいました。

てしてしつ

何か柔らかなものが窓を叩く音が響く。  
そこには、闇夜を切り取ったかのよつて黒い、艶やかな毛並みをした子猫が一匹。

そちらを見たのがわかつたのか、もう一度てしつと音がする。  
まるで、早く開けると言わんばかりに。  
いや、実際そのだらう。この気配には覚えがある。

薄く開いた窓から、刺すよつた空氣と共に、その小さな体がするつと入り込んできた。

ふるりと一つ身震いすると、室内の暖かさを堪能するよつて、ベッドの上で丸くなる。

「温かいお茶でも飲むかい？」

少し考えていたようだが、今はこらなこらしこ。  
その隣に座り、読みかけの本をめくる。

彼は時々、この格好で出歩いているよつだ。  
特に夜間は、子供の姿だとなにかと立つ。

さすがにこの時間に、表からいつもの姿で来られるど、オレにあらぬ疑いが……

その辺の考慮もしてくれている……のかかもしれない。  
彼は色々とやといからな……。

彼と出会いて、何年になるだろうか。

最近は、ふらりとここに来ては、考え事に没頭していく。楽しい考え方でない事だけは確かだ。力になつてやりたいが……話してくれるのを待つところのは、なかにはがゆいものだ。

ふと、隣にある子猫特有の柔らかな毛並みに手がのびる。その毛並みを暫し堪能することにした。

これぐらいだと、彼の思考の邪魔にはならないだろう。

しばりくすると、その手に触れる、ふにふとした感触がある。

小さな手で、てしてしと叩かれる。

その影から、こちらを見つめる瞳が覗く。

「……すまないサスケ。邪魔したか？」

ぽふつとベッドが沈み、子猫の変わりに少年が姿を現す。

彼の黒髪が、柔らかに揺れる。先程までの子猫の毛並みを思わせた。少し潤んだ瞳でこちらを見つめ、その頬が、僅かに赤く染まる。

「カカシくん……手つき口こよ？」

「……。」

「……あつと、そうだ。水……いや、飲み物持つてくれるよ。サスケ

もいるだろ？」

何を動搖する必要がある？ 毛並みを堪能していただけじゃないか！

それにしても、あの田中……いやいや、とりあえず飲み物をだな

くすりと微かに笑い声が聞こえた気がした。

先日、イタチ君が中忍となりました。

そう。中忍。

それ 자체は、すごいことだと思う。

実際、心からお祝いの言葉をかけたんだよね。

……けど。

そう、忘れてた訳じゃない。

今後高い確率で起こるだろう『あの事件』を……。

イタチ君が、一歩それに近付いたという事実を……。

”私”がここに生まれてから、すでに6年が経過した。あの話だつて、元々おにいちゃんの部屋にあつたから読んでたくらいしか知らないのに。

そこに6年の時間経過で、記憶なんてあつて無いような物。そんな曖昧な知識からは、どうすればいいかななんて、まったく推測がつくわけなかつた……

ただ、”私”にもわかるくらいには、うちはの大人達の雰囲気が変わってきた気がする。

どうすればいいんだろうか?

火影様に、九尾事件の主犯は「うちはマダラだから、一族自体は関係無い」とでも言えばいい？

誤解だから、お互歩み寄りましょうとも？

でも、マダラは現在死んだことになつてゐるし、そもそも証拠が無い。 ”私”はあの時、生後半年にもならなかつたのに。知つていていうのはおかしくさる。

実際、見た訳じゃない。

納得させるだけの根拠が示せない……。

そもそも、原因はそれだけとは限らない。

今までの「うちは一族と里との関わり。

うちは一族の選民意識。

うちは一族の力を狙う物。

うちは一族に恨みを持つ物……

そのどれもが考えられるのではないだろうか？

それぞれが複雑に絡み合つた結果であるなら、 ”私”が動けたとして、ただ先伸ばしになるだけかもしれない。

もしくは、 ”私”が思つてもみないこともあるかもしねり。

があれば、何か変わつただろうか？

”私”に、火影様を納得させられるだけの、無視出来ないほどの力

あと何年、このまま過ごせるんだろうか。

それまでずっと、この思いを秘めていなければならぬ……？

さらりと頭を撫でられる。

その手から、優しいぬくもりが伝わってくる。

今までの、潰されそうな程に苦しい思いが、少しだけ軽くなる。

彼のこうした気遣いは、すくへありがたい。

だから、こうしてここに来てしまうのかもしない。

せっかく淹れてくれたお茶が、すっかり冷めちゃったなあ。

「カカシくん……」

「ん？ どうした？」

「……ありがとう。俺、もっと強くなる。頑張るよ」

イタチ君を守れるくらい強く……

やわらかな日差しが室内を満たす。

遠くで鳥達が朝の挨拶を交わしている。

外はまだまだ寒いのか、無意識に体を傍らへすり寄せる。

……あつたかい。

その光とぬくもりで、徐々に意識が浮上していく。

ゆっくりと目を開けると、柔らかそうな銀色が目に入った。いつもは隠されている目の傷が痛々しい。

その薄く開いた唇がほのかに色気を漂わせ、"私"を誘つて……つて、え？

"私"が起きた気配に気付いたのか、彼の黒い目が開く。

寝起きの氣味をまとと、更なる色氣が漏れる。

「おはよツサツスケ」

「ひやわつ……おつおまみつ……」

「ひいめさん、俺、寝ちゃつたんだ?」

顔が熱い。きっと盛大に赤くなっているんだろう。  
思わず彼の胸元に顔を伏せる。

どうしよう……顔があげれない。

それよりも、そう、素顔を初めて見ちゃつた!

前々から、綺麗な輪郭してると思つてたけど。

何あの整いつぱり。だだもれの色氣は。反則だよお……

あれは無自覚なのか? そつなのか!?

くつ……子供だと思つて……ドウシテクレコウ……

そつそれよりも、これつて朝帰りつてやつですか!?

……ヤバい……イタチ君に怒られる……

その日の午前中、里に盛大な雷鳴が響いたとか響かないとか。

## 16・猫（後書き）

変化時の質量とかその他もうもうは、ふあんたじーだからって事で。あんまり動物へ変化してるのでって記憶にないけど、使い勝手悪いのかな？

いつも訓練をしている森の中、”私”は木陰からイタチ君の姿を見つめる。

森の静寂と相まって、鼓動が高鳴るのを感じる。

イタチ君が中忍に昇格してから、一いつして時間を取りるのは難しくなつた。

この、貴重な時間を無駄にしない為、一拳手一投足を見逃さないように、ただひたすら見ることに集中する。

その姿が、宙を舞う。

その瞬間、”私”的視界が変化する。

彼の流れるような動作、筋肉の動き、放たれるクナイの軌道、そこに込められた力。

その計算しつくされたかのような動きに魅了される。

放たれたクナイの全てが、的の中心に刺さるのを確認する。  
クナイ同士を当て、跳躍させることにより、死角のためにも綺麗に刺さる。

しばし呆然と見惚れていると、イタチ君がこちらを振り向いた。  
その表情に、若干の驚きを確認し、慌てて力を抜いて駆け寄る。

……[写輪眼で見てたのバレちゃったかな？

イタチ君に隠すつもりは無かつたけど、厄介ことはなるべく避けたいんだよね。

「驚いた。写輪眼使えるんだ？」

「えっと、まだ上手く使えないんだ。見ることに集中した時、たまに使えるくらい？」

あ、でも一人だけの秘密ね。使いこなせるようになつてびっくりさせたいんだ」「

「……わかった。頑張れよ。

それじゃ、ちょっと早いけど、そろそろ帰ろつか

イタチ君の隣に並び、ゆっくりと屋敷を田指す。

明日から”私”も、とうとうアカデミーへ行くことになった。

ちょっと興味はあるものの、それだけの時間が拘束されるのは、結構痛い。

そんなふうな事を話していると、イタチ君に友達を作るのも大切だよって諭された。

まあ、確かに本来ならそつなんだけどね？

大人になつてから小学校に通うような、そんな気恥ずかしさが……ねえ？

門をぐるうとすると、お父様が待っていた。

何か話があるようだけど、”私”も同席していいのかな？

どうも”私”は、この人が苦手だ。

なんだか、雰囲気があわないんだよね。

一族を纏める立場にいるから、色々と考えないといけないことも多

いんだらうけど。

どうしてこう、地位ある男つて威圧感が酷い人が多いんだろうねえ。  
ある程度は必要なことだとは思うけど……

もつと小さい時は、可愛いところも見せてたんだけだなあ……あの  
時は油断してたのかな？

まあ、”私”<sup>サスケ</sup>のお父様には変りないし、これでも感謝してるんだけど  
どね。

部屋に入り、お父様と向い合つて座るイタチ君の横に、大人しく  
”私”も腰をあおる。

「さすがオレの子だ……中忍に昇格してから、たつた半年でここまで  
で来た」

うんうん、イタチ君はいつも真面目に頑張つてるからねえ。  
自分のことじやないけど、評価されるのはなんか嬉しいな。

「明日の特別任務だが……オレもついて行くことにした」

……ちよ、ちよっとマテ……

どこの世界に、保護者同伴で仕事する社会人がいるよつ！  
そんなの連れて来るのは問題外だが、押しかけてくる保護者とか、  
本人にとつてもまわりにとつても、迷惑以外の何者でもないでしょ  
うがつ！

手伝うつて事だとしても、要請されたわけでもないのに、そんなの  
和を乱すだけでしょ……

……前日にいきなり決定を伝えるとか……何考えてんだこの人……

ああ……イタチ君もやつぱり呆れてるよ……

「『J』の任務が成功すれば、イタチ……お前の暗部への入隊がほぼ内定する」

暗部……そうか。『J』の時期なんだ。  
また一步進んじゃうのか……

一気に気持ちが沈みそうになるのを、なんとか耐える。

「分かつてるな……」

そう言いつつ、お父様の瞳に紋様が浮かび、威圧感が増す。

「そんなに心配しなくても、大丈夫ですよ。それより……」

イタチ君が冷静な対応で打ち切り、"私"に話を促す。

ごめんね、なんか氣使わせちゃって。

でも、別にこの人に無理に来て欲しいわけじゃないんだよ？

一人が寂しい年齢でもないし……まあ、誰が来るのか聞くだけ聞いてみますか。

「あつと、父様……俺明日　」

「明日の任務は、うちは一族にとつても大事な任務となる!」

……"私"の存在は無視ですかい。そうですか。

聞く耳持たないとか、イラッとするよね。"私"もまだまだ大人気ないかあ。

「……オレ、やつぱり明日の任務やめるよ  
何を血迷つたことを言つてる！？」

明日がどれ程大事な日か、お前にも分かっているはずだ！

一体何だと言うんだ！？」

「明日はサスケのアカデミー入学式についていくよ  
入学式には、身内が参列するのが通例。通達もあったでしょ？  
……父上」

ちょ、ちょっとまたああ！

いや、イタチ君が来てくれるのは嬉しいんだけど、でもね？

「兄さん、その気持は嬉しいんだけど、直前の任務放棄とか無責任  
なことをさせるわけにはいかないよ。

俺なら大丈夫。ちゃんと先生に挨拶してくるから。  
それと……父様。

保護者同伴で任務なんて、聞いたことありませんよ？

逆に兄さんの信用を貶めるんじゃないんですか？

助けが必要な任務なら、兄さん也要請するでしょう。それくらい  
判断付かないなら、そもそも中忍になんてなつていませんよ。

俺でも理解出来ることが、父様にわからないはずありませんよね。  
心配なのはわかりますが、もう少し兄さんを信頼してあげてはど  
うですか？

あと、写輪眼使つて威圧する癖はやめたほうがいいですよ

ふう、言つちやつた。ちょっとスッキリ！

……あれ？ なんか一人とも絶句してる……

何かオカシイ」と言つたかな。ちょっと熱くなつちやつたのは認め  
るけど。

「……もういい。わかった。入学式へはオレが行く」

そうして話は無事終わった。

あっれ……？ 別に誰も来なくていいって言つたつもりだったんだ  
けど……まあいつか。

廊下に出ると、イタチ君が頭を撫でてくれた。

ああ顔が緩む……イタチ君もきっと色々言いたいことがあつたんだ  
ろうけど、”私”が言うほうまだ角が立たない、よね？

## 17・入学前日（後書き）

なんだかやたらと難産でした。  
おつかしいなあ……？ 原作あるのにね。

「はあ……」

朝から何度もため息が漏れる。

目の前には、本日からお世話になるアカデミーが、その堂々とした大きな姿を晒している。

アカデミー前の広場には、これから同級生になるであろう子供達が、揃つて列をなして並んでいた。

周囲を見渡してみると、どの子供たちの顔も、一様に喜びと好奇心で満ち溢れている。

前方では、火影様が祝いの言葉を述べているが、そんなありがたい言葉も、右から左へと聞き流す。

見上げる視線の先には、新しい一步を踏み出す子供たちを応援するかのように、澄み渡つた青空が広がっている。

その青さも、今の”私”にはまったく心に響かない。

昨日のあの話から、いつにも増して氣まずい雰囲気のお父様と、二人並んでここまで来ることになった。

後方にある大勢の保護者達の中で、一人難しい表情をしつつ佇んでいるのが確認出来る。

それだけでも気力をゴツソリ奪われるといふのに……

「……サスケくん？ どうしたの？」

隣からヒナタがこっそり聞いてきた。

教師や保護者から少し遠く、周囲も子供達に囲まれていて、あまり目立たないだろうからいいかと言葉を返す。

「ああ……いや、別にたいした事じゃないんだけどね。これ……」

そう言って軽く服を引っ張る。

「そういえば、こつも着てる服じゃないね？ 後ろに家紋付いてる

「父様が、どうしてもこれだけは譲れないって言つんだ……」

「うん、こつもの服のほうがかつ……いいかも……見慣れてるからかな？」

そう、今までなんだかんだと避けに避けに避けていた家紋付きの上着。背中に黒地に紅白で、うちわの模様が大きく描かれている。お父様やイタチ君……いや、うちは一族の皆は、普通に着てているけど。

家紋が誇りなのかもしないけど……

ここでは階が普通に受け入れていて、”私”のほうが間違っているのかもしねない。

けど、どうにも”私”の感性と真っ向から対立するようなこのセンス。

もつ少ししまともな服は無いものだらうか？

……つて言つても、ほとんどコスプレっぽいのしか見かけないのよね……斬新すぎてるよほとんど。

明日からは絶対いつもの服を着てきてやると、一人密かに誓つてみた。

「ヒナタの普段着はあんまり見たことないけど、今日の服も可愛い  
ね。よくにあつてるよ」

膝上までの白い服から、黒いレギンスが覗く。

襟元と裾に散りばめられた小さな花柄が、子供らしい可愛らしさを  
際立たせる。

「そつそんことつ……あ、あの子達のほうが、可愛いこと……」

ヒナタは前方に数人かたまつていてる女の子達を指し示す。  
確かにあの子達も可愛い格好をしているけど、ヒナタの格好も見劣  
りはない。

「うーん、ヒナタはもつと自信持つていいと思うけどな。  
それとも、俺を嘘付きにしたいのかな？」

「あう……／／／」

返答に窮したのか、そのまま視線をあらぬ方へと向ける。  
ほんのり頬が赤いのは気のせいかな……？

ちょっとと言い過ぎちゃったかな？

でも、普通に可愛いと思うんだけどねえ。成長が楽しみだよほんと。

ヒナタでまつたり癒されている間に、前方のお話は一通り終わった  
ようだ。

天気もよく、過ごしやすい気候ではあるが、朝から立ちっ放しでさ  
すがに少し疲れた気がする。

せめて椅子でも用意してくれていれば……まあ、屋外だし仕方ない。

この後は特に何もないよつで、明日からのことも、配られたプリントに書いてあつた。

これで入学式も全て終了らしく、集まつた人々は、帰宅する者や挨拶に向かう者と、それぞれ移動し始めた。

”私”も大人しくお父様の隣へと向かう。

入学式つてこんなもんだっけ？

一番直近でも15年以上前だ。思い出せるわけもないか……

そう思いつつ、入り口付近で先生方に挨拶をするお父様の横で、社会で培つた笑顔 営業用とも言つ を振り撒くことに専念する。

少し肉付きの良い教師に挨拶をする。

どうやらイタチ君のことも知つてゐるようだ。教師歴は長いのかもしない。

この人が担当になるんだろうか……明日になつてみないとわからないか。

出来れば優しい人がいいなあ。

とりあえずアカデミーでの目標は、私の知つてゐる話通りの年に卒業することかな。

ナルト達と一緒にね。

じゃないと、もし間違つて早く卒業しちやつたりした日には、あの蛇がどう動くか……

違うタイミングで襲われたら……やばい、怖すぎる……

その為には、ある程度以上の力は出しすぎないよう気を付けないと、かな。

小さい頃は、子供の成長つてす”こと無邪氣に思つていた。

それから徐々に比較対象が増え、どうも普通より強くなつてゐるような気がする。

ネジ君によく、素早いだの避けるのがうまこだの言われる。まあ、痛いからね。必死だつたよ。

元々、この体の潜在能力が高いのもあるかもしれないけど。

”私”といつもイレギュラーが、変に影響しているのかもしれない……

本来のサスケと今の”私”の体が、完全に同一かどうかは証明出来ない。

生まれたタイミングと名前を継いでいるだけで、体自体は違うのかも……

……いや、今は”私”がサスケなんだ。代わりなんていないんだか

51。

会話を耳にしつつ思考の渦に身を浸してくると、ふとひびき葉を向けられた。

「ヤリにも期待しているよ」

「兄さんのよう、立派な忍になれよ

おつと聞き流すといつだつた……あぶないあぶない。

「はい。兄さんのようとはいいかもしれませんが、精一杯頑張りますので、『忍道の道』よろしくお願いします」

「ははっ、なかなかしつかりしたむすせんですね」

「ちょっと焦つて子供じりしくする」と忘れてやつた……気がしてない  
みたいだし、大丈夫だよね?」

## 1-8・トトロになつました（後書き）

服廻さんとがあるんでしょ「うか？」  
いや、やつとある…よね？

7/13 やつとだけ描写を加筆。

7/17 少し見直し修正（話は変わっていません）

アカデミーへ入学してから数週間。

サスケはようやく通い慣れてきた廊下を歩き、教室の入り口をくぐる。

少し立ち止まるも、軽く室内を見回し、定位置となりつつある窓際後方の席に着く。

朝の柔らかい陽射しに照らされ、ぽかぽかとし、なんとも眠気を誘われる。

少し早いのか、教室の中にはまだ半分ほどしか人がいない。ところどころで、軽い朝の挨拶をしているのが聞こえてくる。そんな中、見慣れた姿が入ってくるのを見かけ、声をかける。

「おはようナルト。隣おいでよ」

振り向いた顔には、嬉しいような少し困ったような表情が浮かぶ。廊下側の席をチラリと見つつ、歩み寄ってきた。

「もしかして、また授業抜け出すつもりだったのか?」

「そっそんな」と、これっぽっちも思ってないってばよー。」

「おまえそれしつかり思つてただる……あとでわかるまで教えてやるから、聞くだけでも聞いとけよ?」

そつと隣を指し示すと、大人しく腰を下ろした。

「サスケはいいよなあー十分強いじゃん。」

オレだって、もっと強くなりたいのに……」

机にぺたりとなつきながら、そつ言葉を漏らす。

どうやら、つまらない授業時間を、修行に当てるつもりだったようだ。

その気持ちは痛いほどよくわかるが……

「ナルト。強さだけを求めるのはダメだよ。田に見える力って言うのは、一番わかりやすいけど、一番溺れやすくなるんだ。知識やその他のことともバランスよく学ばないと、どこかでひどい田に遭うよ。」

少し心配げに言つサスケの言葉に納得しつつも、人には向き不向きがあるんだと言わんばかりに、拗ねた表情を見せる。

「修行なら、あとで一緒にやる。ナルトなら、きっと強くなれるよ」

「うえ……おまえってば手加減知らないからなあー」

そう言つて田に、少しの不満と多大な期待を込めた眼差しを向いた。

ナルトの脱走に釘を刺すことに成功し、サスケはいつも通り読書に移る。

このまま授業中もよく読んでいたりするのだが……

ナルトには正面田に聞けと言いつつ、少しズルイのではないかと思う。

しかし本人曰く、授業もしっかり聞いているとのこと。

「ここは学ぶ場所だし、ついでにもつと知識を仕入れてもいいだらう？」と。本当かどうかは分からぬが。

ナルトは少し恨めしげな気持ちを混ぜつつ、サスケの横顔を眺める。こうして見ると、彼の整った顔立ちがよくわかる。

その切れ長の瞳は、彼の纏う穂やかな雰囲気を受け、柔らかさを増している。

まだ幼さの抜けない顔立ちをしつつも、その幼さをまったく感じさせない。

物腰は柔らかく、男の荒々しさは見あたらない。女々しいと言つわけではないが……

何はともあれ、サスケの隣は居心地がいい。それだけは確かだ。

机に頬を預け、覗き込むように見ていたのが気になつたのか、サスケが本から視線をはがす。

何か言いかけたその唇は、しかし、僅かに聞こえてきた言葉によつて閉ざされた。

「あれつてうちはの　　だよな？」

「あの隣……なんであいつが　　」

「ちつ、図々しいやつだな」

サスケの隣から、カタリと小さく椅子の鳴る音がした。

小声でもナルトにはしっかりと聞こえていたようだ。

その顔には、先程までの笑顔は見当たらない。

「ナルト……」

俺がお前を呼んだんだ。気にするな。そこに居ればいい。いくつかの言葉が浮かぶが、そのどれもが音になる前に飲み込まれて消えた。

「……あんな奴ら、やるなら言葉だけで十分だ。勝つてこじよ?」

いつも言葉にすると、ナルトはにやりと笑い、立ち上がった。彼らの元へ向かう背中を見守つていると、背後の席から声がかかる。

「はあ……お前まためんどくせこじとやつてんなあ」

「ああ、慰めの言葉は簡単なんだけどね……

あれでもずいぶんましになつたよ。昔は自分の気持ちを表現しようとしなかつたからね。つていうかシカマル、いつからいたんだ?」

「ん? ナルトが熱心にお前を見つめてる時かな?

まあ、先生来る前に片付くといいな」

ナルトをけしかけた手前とめはしないが、確かに時間的に微妙で、めんどくせこかもしれないと思つのだつた。

## 19・朝の教室にて（後書き）

なんだかそこはかとなく黒い気がするのはナゼなんでしょう？

先日、夜中にお父様とイタチ君が言い争つて、いのうな声を聞いた。どうやら一方的に、お父様がイタチ君に無茶なことを言つていたようだ。

任務よりも、一族を優先しろとかなんとか……

サスケは家の縁側に腰掛け、庭を眺めながら、つらつらと物思いにふける。

以前よりも、一族至上主義が強まつたような気がする。

強まつたというか、目に付くようになつた……が正解かな？

それだけ、里との緊張状態が増してきたのかもしれない。

幾度かお父様には、それとなく諭すようなことを会話に織りませてみたものの、まったく効果は無いようだ。

子供の言つ事だからというのもあるかもしれない。

けど、それ以上に、その人の中核を成す思想は、簡単には変わらないといふことか。

上に立つ者として、もつと率先して平和的解決を模索して欲しいんだけど……

「サスケ、上期の成績トップだつたんだって？ おめでとう」

「うん、ありがとう……」

近付いてきたイタチがそう声を掛けつつ、サスケの隣に座る。それに対して、あまり嬉しくは聞こえない声で返事を返してしまつ。

「嬉しくないのか？」

「いや、まあ、ちょっと虚しい……かな」

さすがに小さい頃から色々やつてたし、これくらい出来てあたりまえかと思ひ。

自慢するのも恥ずかしい。

「……サスケ、何か悩み事でもあるんじゃないかな？ 最近特に元気ないよ？」

まさか……あの人には言われたとか……」

「いや……大丈夫だよ兄さん。カカシくんは何も言つてないし、他の友達とも仲良くやつてるよ？」

誤魔化すようにイタチから視線を外し、そのまま庭に向ける。その態度は、何かありますと言つてているようなものだつた。

そんなに表に出てたかな？ ……まあ、出ないはずないか。ごめんイタチ君。たぶん今色々とつらい立場だつて、”私”の事でも悩ませて。

でも、この歎みはさすがに当事者には言えないよね。

ふとどこか雰囲気が変わったのを感じて隣を見上げると、イタチの普段見せる事のないような真剣な眼差しどぶつかつた。

「……オレはね、昔から、サスケは何か大きなものを抱え込んでるつていうのを知つてるよ。

それを、全部自分だけでなんとかしようとしている」とも……今

の悩みがそれかどうかはわからないけど

イタチはそこで言葉を切り、その先を言つべきか少しだけ躊躇う。しかし、その瞳には確かな決意が浮かんでいた。

「サスケが言つてくれるか、解決するまで待つつもりだつたけど……これだけ聞いてもいいかな？……オレは、サスケを守るのに値しない存在なのかな？ サスケはオレに守られたくない？」

その声には、僅かに悲しみが込められている気がした。イタチの言葉で、サスケは自分がそれほど酷い状態だったのかと悟る。

そんな見るからに酷い状態にもかかわらず、誰にも頼りうとしない行為が、イタチにここまで言わせてしまつたのかもしれない。

これはしつかり答えを返すべきかと思い、サスケは徐ろに立ち上がり、庭に降り立つた。

そのままイタチのすぐ前に回りこみ、視線を合わせる。

「兄さん、俺は兄さんが守りたいって思つてくれてるの、すぐ嬉しいよ？」

色々話していないことは、確かにある。けど、今は、言えないかな。ごめんなさい。

兄さんを頼りにしていいわけじゃないんだ。……違うね、いつも頼りにしてばかりだよ。

でも、正直な気持ち、守られてばかりはちょっと嫌かな。  
……俺もね、兄さんを守りたい

サスケはその右手をのばし、イタチの頬にそっとふれた。

「兄さんが今後、どんな道を選ぼうとも、どんなふうに成長しようとも、俺は、兄さんを愛してるよ。」

たとえ俺に、他に愛する人がいたとしても、兄さんは俺の兄さんなんだから

この言葉が、この思いが届きますように……

そう願いを込め、彼の額にそっとキスを落とした。

ほんの数瞬くらいだろうか。

彼から僅かに身を引いた時、クスッと笑い声が聞こえた気がした。目の前の顔を覗き込むと、その瞳には、もういつも穏やかな色しか見えなかつた。

「サスケはたまこ、いつちが恥ずかしくなるようなこと言つよね？」

「はえつ……あつと……」

改めて言われたからか、にわかに顔に熱を感じる。

「でつでも、ほんとのことだからつ

「わかつてゐよ。……あつがとつ

「う……感情に任せて動くとろくな事にならないこと……まあ、でも、イタチ君がどことなく嬉しそうだからよしとしよう。

サスケの顔の熱が解消するには、まだ暫くかかりそうだった。



このまにか畠山つかよつまくやんつ  
エハコトになつた！

あくまで兄弟愛ですよ？ …たぶん。

## 21・放課後の「予定は？」

放課後の教室で、サスケは一人帰り支度をする。周囲には、もうほとんど残っている人はいなくなっていた。

今日はネジ君と約束があるって言うのに、少し遅くなつたかなあ。こういう時に限つて、先生にお願い事をされたりするし。断ればいいんだけど、日本人の性つて言うのかな？まあ、まだ許容範囲だよね。……着いたら謝り倒そ。

そういうえばイタチ君へのこっぽずかしい発言をしてしまつたあの日、家に殴り込みがありました。

あのイタチ君との、なんとも言えない恥ずかしい空氣をぶち壊す勢いでね。

あれはもう数ヶ月前になるのかな……

うちちは一族の頭の固そなのが三人も押し掛け、上から田線で、イタチ君への恫喝紛いのひどい言ごぐさ。

うちちはシスイさんつて方が自殺したそつだけど、実は他殺じゃないかつて。なんかイタチ君を疑つてた。

“さんざん”私”の忍耐力を折つてくれちゃつて……つい説教モードになるのは仕方ないよね？

最後にはなんか捨て台詞吐いて帰つてつたけど……

あんな過激派チックなのがいるから、どんどん平和的解決から遠ざかるんだろうなと再認識したよ。

うちちはの血に才能があつても、思考が凝り固まつてたら意味無いの

……なまじ力があるから、それに訴えようとする、か。

つてかやばい、急ぐんだつた！

思考に浸るのは悪い癖だと思いつつも、ついつい余計なことまで考えていたようだ。

遅れているのは間違いないので、少し急ぎ気味に廊下へと踏み出した。

「サスケくう～ん！」

どこか甘ったるい高い声が、廊下に響く。

来るだろ？衝撃に備えると、やはりと言つべきか、背後から勢いに任せて抱きつかれた。

肩に届かないくらいのよく手入れされた金髪が、サスケの首筋をさらりと撫でる。

まだ残っていた子供達が、驚いたようにこちらを見ている。

廊下の先では、数人の女の子達が、羨ましそうに背後の彼女を見ていた。

……間違つても真似しないでよ？

そう思いつつ、もう何度目かの注意の言葉を背後に向ける。

「……いの、危ないから飛び付いたらダメだつて言つたよね？」

「え～だつて、もついいなつて思つてたから嬉しくつて

そう言いながらも、まだまだ離れよつとはしない。  
ほんとにこの子のアクティブっぷりには驚かされる。

あの話でも、かなり積極的な娘だとは思つてたけど、想像以上だつたようだ。

まあ、あのサスケと”私”では性格も違うから、いのの行動も、より積極的になつてるだけかもしれないが。

「ほり、とりあえず手、離してくれるかな？」そのままだと歩きづらいからね

「ん~残念。じゃ、かわりに一緒に帰ろうつよ」

名残惜しそうに、いのの手がサスケから離れていく。

玄関に向かい、いのと並んで歩を進めながら、断りの言葉を紡ぐ。

「あつと、『ごめんね。先約があるんだ』

ちよつと遅れちゃつててね、急いで行かなきゃいけないんだ」

「ええ~つ！ セつかくだったのにな~」

そのちよつと拗ねた表情も、子供らしくてなかなかに可愛い。

どこか微笑ましく思いながら、サスケは慰めるかのよつて、いのの頭にぽんぽんと手を置く。

玄関に到着するまでには、なんとかいのを宥めることに成功した。その入り口横の壁際に、短めの黒髪をした女の子が背中を預けている姿を発見する。

「あ、ヒナタ。もしかして待つてくれた？」

「えつ、あ……うん。ネジ兄さんが、遅れたらペナルティだつて言ってたよ」

「うう……それはもう確定かもね

今日はなんだう……片手使うなとかかな?  
なにかムチャ振りされたらどうあえず逃げよ。そうしよう。

ヒナタに向かつて進むと、隣にいたいのが微動だにしていないのに  
気付いた。

訝しく思い振り向くと、どこか呆然としたような、ちょっと驚いた  
ような表情をしていた。

更に後方、歩いてきた方向の廊下には、一歩前に向かつて走つてく  
るピンク色の髪をした人影が見える。

ああ、サクラ忘れてきてたんだね。一緒に帰る予定だったのか。  
んじや”私”は先に帰らせてもらおうかな。  
本気で遅れると、お仕置きが怖い……

「じゃ～俺行くね。またね、いの  
「いのちゃん、また明日～」

「…………えつ…………あ、ばいばい」

いのは、田の前から遠ざかっていく一人の後ろ姿を、ただ呆然と見  
つめ続けた。  
タツタツと、背後から近付く足音が聞こえるが、振り向くことすら  
思い付かない。

「いのちゃん、置いて行くなんて酷いよ。

……何かあつたの？ あれって、サスケ君だよね？」

廊下での出来事を知らないサクラは、遠ざかる一人を確認し、ここで何かあつたのかと思う。

「サクラ……あれ、どう思う？」

「あれって……？」

何が言いたいのかと訝しく思い、視線をたどった先にいた前方の二人を観察する。

サスケの隣にいる人物の後ろ姿から、同じくノ一クラスのヒナタだとあたりをつける。

会話する際に見えたその横顔からは、男の子に対するいつもの躊躇いが感じられない。

二人が道の端に消える頃、やつとサクラは隣に声を掛けた。

「隣にいたのって、ヒナタだよね……？ なんだか普通に話してるように見えたんだけど……」

ヒナタは大人しいほうの部類に入ると認識されている。男の子に積極的に話しかける姿など、想像も出来ない。

その彼女が、学年トップで顔もよく性格も優しいと、注目を集めないはずがないサスケと一緒にいるのだ。しかもいたつて自然体で……

「さつきサスケ君と一緒に帰ろうつって誘つたら、先約があるからつて断られちゃつた……」

「えつ、それって……」

一緒に帰らうと誘つたことを羨めばいいのか、先約らしいヒナタを気にすればいいのかと、少し戸惑つ素振りを見せる。いのは全身の緊張をほぐすかのよつて、一つ大きなため息を付いた。

「もちろん、ヒナタと一緒に帰るからって断られたわけじゃないけどね」

「ふうん……でも、その先約と関係ないわけじゃなさうよね。それにしてもヒナタの態度、珍しかったね」

「これはヒナタに聞くつもや無いわよなつ！ あんたもやつ思つてしまつー？」

興味はあるけど、この友人が暴走した時には庇つてやうと、サクラは密かに決意するのだった。

## 2.1・放課後の「予定は?」(後書き)

このじゅのサクラは、ちょうど変わり目の頃かなと勝手に想像。いのともまだライバル宣言してないんじやないかな?と。

雲はいいよね……自由にふわふわと漂つて。

確かにシカマルも好きだったはずだけど、なんかすゞしくよくわかるかも。

見上げるそこには、ぽかりと浮かぶ真っ白な雲と、澄み渡る青空が広がっていた。

見晴らしのいい屋上で、軽く手摺りに体を預ける。その手摺りのどこからか、きしりと鳴る音が響いた。誰かが落ちる前に補修しないと危ないのになと思いつつも、サスケはただただ景色を視界に収める。そして強くもない風が、その漆黒の髪を乱していった。

「そろそろ”私”が精神的に限界に来ているのが、自分でもよくわかる。

『あの事件』の詳しい日付なんて、初めから記憶に無い。

今日なのか明日なのか、来月なのか来年なのか……もしくは、回避出来たのか？

真綿で首を絞めるようなとはよく言つが、こんなにもじわじわと苦しみが増すとは。

いつそのこと、一足飛びに数年程時間が進まないものか。そんな馬鹿げた思いに囚われる。

こんな不安定な時に一人でいるのは危険なんだけど。

残念ながら、彼は見つからなかつた。きっと任務なんだろうかといって、他の誰かと過ごす氣にもなれない。

唯一の逃げ場所を塞がれた”私”は、ただただ落ちていくに任せるしかなかつた。

明日からは、またいつも通りにきつとなるから。  
だから、今くらいはいい、よね……？

誰にともなく、そう言い訳を用意する。

じわりじわりと、何かが”私”を侵食していく……

どれくらいそうしていたのか。

日陰がサスケを覆い隠し、太陽がだいぶ落ちてきた頃、屋上に誰かが上がりてくる気配がした。

背後から近付いてきたその人物が、おもむろにサスケに声を掛けた。

「元気が無いの。子供は笑顔が一番じゃぞ？」

その思わず声に驚き振り返ると、この里のトップである人物、火影が立っていた。

「ええ、まあ……」

どうしてここに？まさか、タイミングを見計らつて来たとか……いや、そんなハズはないか。”私”に用事とか考えづらい。

沈んでいる理由が、これから来るであろう『あの事件』のせいだと言えるわけもなく。  
おざなりな返答になるのは、仕方ないだらう。

しかし、これは話をする絶好の機会ではないだろうか？

軽く周囲を確認してみると、見える範囲には誰もいない。

地位ある人が単独で動くはずがないので、暗部か何かは控えているだろうが。

危険な発言さえ回避すれば、特に聞かれても問題無いだろうと判断する。

「少し、聞いていただいてもよろしいですか？」

サスケの隣に立つ火影にそう問いかけると、鷹揚なうなずきがかえる。

それを受け、サスケはどう話をするべきか思案する。

さてと、どう話をすればそれとなく伝わるか……あまり直接的に言い過ぎると、余計な疑惑を持たれちゃうかな？

”私”はあまり会話スキル無いんだけどな。

まあ、こんな機会早々無いだろうし、頑張りますか。

「……人と人が仲直りするのって、難しいものですね。

一度離れると、相手を理解しようとすらしなくなります。

それぞれが勝手な思いから創り上げた相手の虚像に振り回されて、更に負の感情が増してしまいます。

そうしてますます相手との距離が開く……負の連鎖を引き起こす。

最後に行き着くのは……存在の拒絶

サスケの言葉に、火影は少し驚いた表情をする。

ただの子供の喧嘩ではない、何か違った印象を受けたようだ。

「やうじやな。じゃが、人には言葉がある。話をする」とによつて、  
その道を回避することも出来よう」

「理想は、お互歩み寄つて話をする」とによる、認識の擦り合わ  
せ。ですかね？」

お互いが何を思い、何を求めているのか。それを少しでも理解出  
来れば、落とし所も見えてくるんじょうけど。  
実際は、なかなかうまくいかないものですね……」

「……どちらか一方でも曇つた日で相対すると、どうしてもどちらか  
で間違つた結果が生み出されるものじや。」

結論を急がず、根気よく対応していくしかないのう。

おぬしも、一人で思い悩むでないぞ？　たまには今のよつて、周  
囲に話をしてみるとよい。

きっと味方になつてくれる人も出でてくるだらうしの」

「……そうですね。

お時間取らせてしまい、申し訳ありません。

聞いていただけてよかったです。ありがとうございました」

「うむ。元氣でやるがよい。

それと、今後もナルトと仲良くしてやつておくれ」

火影は最後に穏やかな微笑みを残し、立ち去つていった。

どこまで伝わつたんだろうか？

もつとストレートに言わないとダメなのか。

なんだか期待してもいいようなそうでもないような、微妙な反応だ  
つたなあ……

はつ、まさかあの人、最後の言葉を言つためだけに会いに来たとか  
……？

## 22・いわゆる逃避（後書き）

なんだかそろそろ壊れそうになつてますね  
ああそういうば、3代目の水晶欲しいな  
…

## 23・嫁にやるんじゃないよ

「イタチも優秀じゃが、あの子もなかなかに変わった子じゃの。やはり、つちはの血かの。成長が楽しみじゃ。

そりは思わんか？」

執務室に戻りながら、火影はサスケをそう評する。

確かにサスケはどこか子供らしくない、変わった所がある。先程の屋上での会話にもそれが伺える。だが、今日の彼はいつもより沈んでいた気がする。オレの部屋で悩んでいる時のように。いや、それ以上に……

太陽が沈み、闇が勢力を伸ばす頃、カカシは夕方の屋上を田舎して急ぐ。

もういらないだろ?とは思つものの、一人佇む姿が脳裏をちらつく。

目的の建物に近付き、そこに人影を確認する。

少しの足音も立てず、屋上に降り立つ。

そこには、夕方見た時と変わらぬ姿でサスケが佇んでいた。月光に照らされるその姿は儚く、今にも壊れてしまいそうで……

ズキリと走った心の痛みに、思わず胸元に手を当てる。

サスケは何も話そとしない。

湖に落ちた時も、部屋に来る時も。

そして、たぶん今回も……

オレに出来る」とせ、そばにいる」とへりいしかないのか。

物音を立てれば消えてしまいそうなその姿に、そつと声をかける。

「サスケ……」

ゆっくりと振り向いたその顔には、僅かな驚きと、安堵の表情が浮かぶ。

「……カカシくん……なんで……」

微かに耳に届いたその声には、少しの力も感じられなかつた。その口元に僅かに浮かぶ微笑みも、無理に作ったかのようで。そんな顔をさせておきたくない。

微笑ましそうに笑う顔、はにかんだ表情、じく稀に見せる無邪氣な笑顔が思い出される。

それと同時に、最近サスケの笑顔を見ていないことに気付く。その事実に愕然とし、動けなくなつた。

カカシが動けずにしてる中、サスケがふらりとこちらに近付く。一步一歩、ゆっくりと近付いてきたサスケのその手が、カカシに伸ばされる。

そのまままわりと背中に手が回る。

「……『めぐ、このままこなせて……』

胸にも届かないその小さな体で、精一杯縋り付く。

その体が僅かに震えているのがわかる。

……泣いて、いるのか？

何も言葉にせず、それでもなお助けを求めていたかのように感じた。かける言葉が出てこない。

少しでもその心が安らげるよう、サスケの髪を梳き、その背をなで続ける。

『最後に行き着くのは……存在の拒絶』

夕方聞いた言葉が蘇る。

あれはいつたい誰を指しているのか……  
いくつか考えてみるもの、そのどれもがサスケをここまで追い詰めるには弱い気がした。

ふと氣付くと、いつのまにか、腕の中の震えが止まっていた。

背に回された手が、力なく落ちて行く。

そのまま崩折れるサスケを、危なげなく抱き上げる。

張り詰めた糸が切れたかのように、深い眠りに落ちたようだ。

「大丈夫、眠っているだけだよ」

死角となる建物の影に向かい、そう声をかける。

いつからそこにいたのか、その影から一人の人物が近付いてきた。黒髪に整った顔立ち、まだまだ若いながらも、確かな力を示す彼。

たぶんきっと、サスケを探しに来たのだ。

腕の中のサスケを引き渡そうとするが、そのまま首を左右に振られる。

今は彼よりオレのほうがいいだろうと。部屋まで送るよう頼まれる。

そのまま探るよつた、ビルまでも見通すよつな目を向けられる。

「サスケには、あなたが必要なよつですね。

私にはそんな姿、見せたことありませんから……」

どこか寂しそうに、やつてぶやく。

「それでも、お前達は兄弟だろつ。特別な絆じやないか。切ろうと思つても切れないものだ」

「……あなたは？」

「オレは……何だろつな。友達、か。

サスケはどこかほつとけない存在だよ」

カカシは、憂いを含んだ視線をサスケに向ける。

その姿をつぶやに観察していたイタチは、徐ろに頭を下げた。

「どうか、サスケをよろしくお願ひします」

「なんか、嫁に出すよつなセリフだな？」

言った瞬間、まるで射殺すかのような冷たい目で睨みつけられた……

「……すまん、冗談だ。  
もちろん、大切にするさ。サスケを傷付けるようなことはしない  
よ」

23・嫁にやるんじやなこよ（後書き）

カカシさんとイタチさんの会話を見たかったのです。

## 24・『あの事件』改め、『うちは事件

あれから”私”は、放課後は極力一人にならないようにしてくる。ネジ君とヒナタと修行したり、ナルトも一緒に混ざつたり。カカシ君を見つけて相手してもらつたり。

まあ、言つてしまえば帰りたくない。帰る瞬間が怖いんだ。

お父様への話もうまく進まず、火影様にはそうそう会えない。今の立場では、これ以上どうにも出来ないのかかもしれない。いや、もうとつぐに気付いていたことだ。

誰か頼れる人……やはり、カカシ君に相談するべきかもしれない……

今日は珍しく誰も捕まらず、一人だつた。

たまにはこんなこともあるかと思い、いつも使つている森で、ひたすら体を動かして思考を振り払う。

時間を忘れてひたすらのめり込んでいると、いつの間にか太陽が落ちていた。

あたりが闇に染まる中、家に向かい、里の中を歩く。家路を急ぐ人影が、ぽつりぽつりと見える。

普段は人の多い通りも、この時間になると寂しくなるものだ。

このままカカシ君に会いに行こうかとも思つたが、任務だと言つていた氣もする。

……明日こそ、いや、帰つて来たら相談しよう。  
そうやって決断を先延ばしにする。

今日も無事一日が終わりますよ」  
日課になつた願いを込めつつ、サスケはつむぎの敷地をくぐる。

その日に、道に落ちている大きな荷物が飛び込んできた。  
うちの家の紋入りの布に包まれたソレ。  
布からのぞくボールのような丸い毛並み。  
どこまでも白い、棒状のものが布からはみ出している。  
その布を、赤い絵の具が染め上げる……

反射的に家に向かつてかけ出した。  
進む道は、どこも赤く彩られている。  
そこに落ちているマネキンのようなソレらしが視界に入るも、その全てを意識から切り離す。  
ただ早く、家に着くことだけ考える。

まつて、まつてよ、早いよ、まだ、いやだ、イヤだ、嫌だ

「 兄さん！」

「こをどう走ったのか、いつもと変わらぬ玄関を開け、靴を脱ぐのももじかしく、そのまま家に駆け上がる。  
どこにいるのだらう？ それとも、家にはいないのか？

「 兄さん！ にこさん、どう…？」

「サスケ、来てはならん！」

一つの部屋の中から、父親の声が聞こえた。

ゴクリと生唾を飲み込む音が、やけに大きく聞こえる。

扉に向けた手の震えが止まらない。

中からどさりと何かが倒れる物音が響く。

開けたくない 開けてはダメだ

そのどこか悲鳴にも似た警告を無視し、震える手でその扉を開ける。そこには、想像に違わない光景が広がっていた……

仰向けに横たわる、人形のような生氣のない母親。それに覆い被さるようにして倒れ伏す父親。

そのあまりにリアルなソレに、今にも動き出すんじゃないかと錯覚する。

いや、先程までは動いていたんだ。

それを動かぬ物体に変えたのは……

「……にいさん……」

守れなかつた。止められなかつた。変われなかつた。

”私”しか変えることが出来なかつたのに！

この結果は”私”の選択の結果、”私”の弱さの証明……

イタチの手が僅かに動く。

決別するかのように投げられた手裏剣が、サスケの肩を切り裂いた。

その瞳に視線を合わせると、イタチの写輪眼の紋様が変化する。

その瞬間、世界が変化した。

父親の死が、母親の死が、隣人の、店主の、道行く人々の死がサスケを埋め尽くす。

切られて出来ていく傷跡も生々しく、その命の尽きる瞬間が、目に焼き付く。

そのあまりのリアルさに、自身が殺戮を犯しているかのように思えてくる。

これを、イタチ君に背負わせた……

「ああああああああああ……！」

気付いたら、両親の死だけが目の前に存在していた。

「オレを恨め。憎め。お前はオレの為だけに生かされている。  
そして、オレと同じ万華鏡写輪眼を開眼して会いに来い」

「はつ……ははつ、ダメだよ兄さん。それはダメだ。それだけは出来ないよ。

あの田の言葉は取り消さない。今までも、そしてこれからもね」

サスケは崩れそうな体をなんとか支え、イタチに近付く。

「でも、大丈夫。俺は強くなるよ。きっと強くなつてみせる。  
ここに、この里で生き抜いてみせるよ」

サスケの瞳から、透明な霧が幾筋も零れ落ちる。

その両手を精一杯イタチの首にまわし、抱きしめる。

このまま引き止めたいたが、それは不可能なことくらい理解している。  
だから、せめてもの言葉を、その耳元に囁く……

「兄さん、愛してるよ……」

だから、どうか無事で……ひとつまた会おうね……

## 24・『あの事件』改め、うちは事件（後書き）

結局サスケの立場だと、事件回避は出来ませんでした。  
ほんとの事件は根が深いデス。

カカシは任務の報告時、いつもと違う里の雰囲気の原因を聞いた。数日里を離れている間に、うちちは一族の惨殺事件があつたそうだ。その死体は、ほぼ急所への傷のみで、欠損も少なく綺麗なものらしい。

想定外のその話に、一瞬目の前が暗くなる。

心配していたサスケは、うちは一族唯一の生き残りだそうだ。この里で唯一の……

その話を聞いた後、すぐにサスケの入院している病院へ急いだ。現在、精神的に不安定な為、数日入院させるようだ。その間に、事後処理を行うのであるうが。

事件が事件な為、病室には個室が用意されていた。逸る気持ちを抑えつつ、静かな廊下を早足で歩く。それ違う人全てに怪訝な顔をされつつも、程なく病室へたどり着いた。

その部屋の簡素なベッドの上には、少年が背を預けて座っていた。力なく投げ出された手足。その瞳はどこか焦点が定まらず、何を見つめているのか。

左肩に見える包帯以外は、目立った外傷は見当たらない。そのことに、深い安堵を覚える。

カカシは病室の入り口を閉め、ベッドの側にあつた椅子に座る。サスケはその行動に一切注意を払わず、視線を向けようともしなかつた。

発見当時、サスケは動かぬ両親の側で、その姿を見ていたそうだ。  
そこには、多くの一族の死を目撃しているはずだ。  
その心に、多大な傷が刻まれたことだろう。

どれくらいこうしていたのか。

今まで何の反応も示さなかつたサスケが、ポツリと言葉をこぼした。

「……俺は、結局兄さんを助けられなかつた」

犯人はイタチだとされている。

サスケの左肩の傷から、イタチと対峙していることだらう。

両親が殺された瞬間を目撃しているかもしれない。

それなのに、その言葉には、イタチへの悪感情は伺えなかつた。

「……いつか、こうなると思つてたんだ。……でも、どんなに頑張つても、俺だと何も変えられなかつた。

全てがわかるわけじゃない。正解なんて知らない。何も変わらず日々が過ぎていくことに、どこかで諦めていたのかもしれない。  
それでも、諦めたら終わりだったのに。俺が諦めたら……」

その何も写さない瞳が揺れる。

事件の日の出来事でも見ているのだろうか。

「ははっ、結局逃げたんだよ。怖かったんだ。ちょっと頑張つてゐりして自分を騙して。私の行動で良くなる保証なんて無いことは、十分理解してるから。それでも……他にいなかつたのに……

父様も母様も、確かに私の両親だつたのに。そんなことにも気付かずに。ただ早く過ぎ去ることを、楽になりたいとすら思つて……

今更気付いても遅すぎるよね。……私がつ、わたしが見殺しにしたくせにっ！

全てをあの人に背負わせて……何もつ……はつ、あつ……なにもできなつ……くつ……」

自身の感情に翻弄されているのだろう。サスケの呼気が乱れる。苦しそうに、力ないその手が胸元をさまよつ。サスケの瞳が、怪しく真つ赤に染まる。その瞳に浮かぶ巴紋に、僅かな違和感を感じた……

「サスケ！ 落ち着いて、大丈夫。大丈夫だよ。呼吸を意識して。ゆつくじと」

「んつ……はつ……」

カカシはとつさに椅子から立ち、サスケの体を抱きしめ、安心させるようにその背を軽く叩く。

先程吐き出された悲鳴のような言葉から、サスケの悩みの一端を知る。

いつたい、どこまで読めていたのだろうか？  
いつから、この恐怖と戦つっていたのだろうか？

屋上での言葉は、正しくこの件を指していたのだろう。

そして、あまりに危険な予測の為、誰にも言えず、その予測を回避出来なかつた自分を攻め続けるのか……

腕の中のサスケの呼吸が、徐々に落ち着いてくる。

それと共に、サスケの両手が頼りない力でカカシの胸を押す。

僅かに空いた距離。そこから、サスケの表情が伺える。

取り乱したことを恥じているのか、頬を染めつつ苦い表情を浮かべている。

その黒い瞳は先程までと違い、確かにこちらを~~じ~~見ていた。

「……ごめん。なんか変な」と言ひちやつて

「いや、いいよ。溜め込むのはよくないからな。いつでも言ひてくれてかまわないんだよ？」

それと……サスケが無事でよかつた。

心配する人間が、ここに確実に一人はいるんだ。それを、忘れないでくれ

そう、けして独りじゃないんだ、と。

サスケがコクリと頷くのを確認し、その姿を再度腕に閉じ込める。

そのまま暫く、サスケが羞恥のあまり嫌がるまで、存分にその髪を梳き、存在を確かめるのだった。

## 25・事件のあとで（後書き）

あのままだと壊れそうだったので、サスケの毒抜きです。  
なぜか難産でした。はう。  
ホントはもつと壊れっぷりを表現したかったんですが。  
。

「ちょっと… 聞いてるの…？」

いつもと変わらぬ昼休み。ざわついた雰囲気に包まれるくノ一クラスの教室内に、小さくも鋭い声が響いた。

居合わせた少女達が、何事かとそちらを振り返る。

その視線の中心となつた教室の後方には、数人の少女達に囲まれている少女が一人、佇んでいた。

あわつわつ、どうしよう、どうすれば許してくれるかな？

それはほんの数分前、お昼にしようとお弁当を持って立ち上がった時、たまたま後ろを通りかかった一人の少女に、ほんの軽く肩が当たつたのだった。

反射的に謝るも、小声すぎて聞こえなかつたのか、何かが機嫌を損ねたらしく、壁際に詰め寄られる。

もう一度謝罪の言葉をかける隙すら無く、いつのまにか彼女の友達二人に逃げ道を塞がれていた。

そこから、なんだかよくわからぬ話になつていつたのだった。

「だいたい、あんたは前から日障りだつたのよ。日向のお嬢様だから仕方なくサスケ君に相手にしてもらつてるくせに、当たり前のような顔して彼の隣に立たないでくれる？ あんたなんか日向のお嬢様じやなかつたら、見向きもされないくせに…」

「やつよやつよー ちよつとほなサスケ君の迷惑も考えたらどうなの  
ー?」

彼女達の言葉に、何を言えばいいのかわからず、結果的に沈黙を守ることとなつた。

わつ、わたしが可愛くないのは知つてるよ？ とりえなんて特に無い  
いし、なかなか強くもなれないし……

サスケ君と一緒にいるのは、小さい頃からの友達だからなんだけど  
……つて、友達って勝手にわたしが思つてること？

あう……どつどつじょつ……でつでも、サスケ君はネジ兄さんに会  
いに来てるわけで……わたしはただのオマケなんだよ？  
だから、別にわたしが特別じゃないと思つただけビ。あれ？ ジヤ  
あ特別なのはネジ兄さん？

思考がぐるぐるとまとまらず、視線が彷徨う。

ヒナタのそのおどおどした態度に気を良くしたのか、取り囲む少女  
達から更なる言葉が投げつけられようとしていた。

少女達から言葉が溢れる直前、意思の強そうな声に割り込まれる。

「あんたたち、一人相手に何醜いことやつてんの？ こーんな所を  
サスケ君に見られたら、何つて思われるのかしらあー？  
あ、顔も名前も覚えてもらえてないんだから、何も思われるわけ  
ないわよねつー！」

忘れてた、『めんねー？ そつ言つて近付くいのに驚き、少女達が  
怒りを込めた視線を向ける。

その隙を付いて、サクラが崩れた包囲からヒナタを引っ張り、背後

に底いつつ距離を取る。

「ヒナタ、大丈夫?」

「う、うん。でも、いのちゃんが……」

「あつちは任せて大丈夫。私も前に助けられた」とあるしね。くやしいけど、いのに口喧嘩で勝てる子なんて、そういういわよ。それより、お昼一緒に食べよ? いつもどこに行ってるの?」

「えっとね、庭にお気に入りの場所があるの。木陰になつて風が気持ちいいんだよ」

いのの独壇場を眺めながら、ビニカのほほんとした会話が紡がれていった。

それから程なくして、木陰でお弁当を広げる二人の姿があった。

「それにしても、ヒナタも無事でよかつたね。次また何か言われても、無視して逃げていいいんだからね? あんなの相手にすることないんだよ」

「うん、サクラちゃん。いのちゃんも、ありがとう」

「ま、何かあつたらいつでも言いなさいよね。

でも、実際あの子達もサスケ君が心配だつたんだと思うなあ。蹴散らしといてなんだけど。

色々聞きたかつたんだと思うよ？ けど、普段から嫉妬の対象としてるヒナタには、なかなか素直になれないんでしょ。

しかも、本人がこゝんなぽやぽやだと余計に……ねえ？」

「ちょっといの、ホントの事言つたらダメじゃない！ 本人気づいてないかもしれないのにっ」

「あうう……一人ともひどいよお」

あはは！」めん」「めん。これ食べていいから、ね？ そつまつて一品ずつヒナタのお弁当に上乗せした。

ヒナタからのお返しを受け取りつつ、いのが口を開く。

「あれから結構たつたけど、サスケ君大丈夫かな。  
いつもみんなに心配させないように、無理して笑つてるのがわかるのよねえ。

なんだか儻げ？ 影があるよつて言うの？ そじがまたイイんだけどねえ／＼／＼／＼／＼

「ちょっといの、不謹慎よつ！（激しく同意するわつ……）」

「ん、ネジ兄さんにも会いに来ないし、あれからこゝでしか顔見でないからちょっと心配、かな？」

でもきっと、サスケ君なら大丈夫だよ。だつてこゝに来てるんだもん」

そんなヒナタの無条件に寄せる信頼を聞き、一人は顔を見合わせる。サクラが視線で何か訴え、それに応えるかのようにいのが軽く頷くと切り出した。

「ねえヒナタ。私はヒナタのこと大切な友達だと、いえ親友だと思つてるのよ？」

親友が悩んでたら一緒に答えを探したい、困つてたら助けにしたい。

その為には、もつと色々なことを知る必要があると思うのよ。……で、実際のところ……」

「「ヒナタはサスケ君が好きなの！？」」

見事なハモリを披露しつつ、真剣な目でヒナタを見つめる。

ヒナタは自分の価値を軽く見ているが、その穏やかな性格、柔らかい雰囲気、容姿も可愛い部類に入る。

そして、なんといっても見事なまでの天然っぷり。

そんなヒナタの魅力に魅せられた哀れな子羊が、かなりの数引っかっているのだが、本人はまったく気付いてすらない。これがライバルになるのは脅威としか言いよががない。

負けてはいるが、楽勝でもない。出来ればライバルなんて遠慮したい。

一人ともにそんな事を思いながら、ヒナタの答えをただじつと待つ。

「えつ……えつと、わつわたしが、サスケ君を……？  
むつむりだよおー！ わたしなんてそんなつ

確かにサスケ君は頭もいいし強いしかっこいいし優しいから憧れるかもだけど、どこまでも高い雲の上のような存在で、いつまでも届かない目標の人で、わたしなんかとは全然違う、ものすごく遠い人なんだよ！？」

「お、落ち着いてヒナタ、わかった。ちゃんとわかったから。  
サスケ君のことは好きだけど、恋愛的な好きじゃないのよね……？」

サクラのその言葉は確認と言つより、そうであつてほしいとの希望が幾分混じつていた。

二人の視線を受け、ヒナタは赤くなつた顔をこくりと縦にふる。

ほつと胸をなで下ろすサクラといの。が、ここで安心するのはまだ早い。

今は大丈夫でも、この先どうなるかなんてわからない。

恋心なんて、自分で制御出来るものでは無いことは、身を持つて知つていて。

だからこそ、楔を一つ撃ちこむことにした。

「じゃあヒナタ、私とサスケ君のこと応援してくれる？」  
「あ、するいっ！ もちろんこっちも応援してよねっ？」

サクラといのが同時に詰め寄る。その勢いに押され、ヒナタは一人とも応援することになるのだった。

……でも、一番に応援するのはサスケ君本人だよ？



女の怖い超怖い・・・  
でも、ヒナタは家の都合上、直接的な陰湿なイジメは受けないので  
はないかと思います。  
ちょっと溜まつてたのが噴き出しちゃつたんだひつねれつと。

## 27・料理できただんだ？（前書き）

書いてなかつたら書き方忘れました。あ～れ～？  
読みにくかつたらすみませんです。

## 27・料理できただんだ?

イタチ君が”私”の前を去つてから半年程、火影様の屋敷にお世話をになった。

どういう思惑があつたのかは不明だが、火影様が”私”の後ろ盾になつたということを、対外的に示す結果となつただろう。

あとは、貴重なうちは生き残りである”私”に対する刷り込みか？美味しい食事と安全な寝床。何も考えなくとも生きていける、そんな状況。

あの頃の”私”には、かなりありがたかつたが……

単純な善意だとするなら、すでに屋敷は孤兎で溢れていることだろう。

残念ながら、さすがにそこまで”私”はおめでたく出来ていなかつたようだ。

だが、まあ、里を管理する立場として考えれば、否定出来なくもない、か。

病院から屋敷に移つてから数週間のことは、実はあまり覚えていない。

食事以外は、ほとんど『えられた部屋に閉じこもつていた。

とにかく、考えるべき事が多すぎ、そして何も考えたくなかつた。

そのうち、うちは一族の合同葬儀が執り行われたりもした。生き残りへと向けられる、ぶしつけな好奇の視線が、ただひたすらに煩わしかつたのを覚えている。

他人の視線が凶器となつうことを、改めて思い知つた。

偶然生き残つたのか、生き残られたのか。はたまた生き残りを装つてゐるのか……そんな囁きが聞こえてくる。

所詮他人事。噂話ほど美味しいものは無い、と言つたところか。こんなことでも、一族がかなり孤立していたことが伺える。

一族の力に縋り、過信し、盲信して、周囲を下に見てきた結果だろうか。

そんな力馬鹿は一部だつたと思いたいが、こひう結果になつたと云ふことは、まあそういうことだらう。

お屋敷にお世話になつて一ヶ月が経過した頃、ようやく周囲の状況に気が向くようになつていて。

最初の頃に感じた監視の目も、ずいぶん大人しくなつていた。

まだまだアカデミーに顔を出す余裕も無かつたので、屋敷を探索したりして過ごしていた。

屋敷の書庫を発見してからは、かなり充実した日々を過ごさせてもらつた。

禁とかなんとかあつた氣もするが、きつと集中しすぎて疲れていたんだろう。

そんな三食昼夜付きの楽園も、永遠では無いといふのを知るのは早かつたわけだが……

教壇に立つ教師の終了の声と共に、教室に弛緩した空気が流れる。いそいそと教室を出る者、早速弁当を広げる者、固まって噂話に花を咲かせる者などで一気にざわついた雰囲気に包まれる。

いつものように適当にパンでも買って「よし」と腰を上げかけたナルトの前に、四角い包が差し出された。

不思議に思い、隣に座るその手の主に視線を向ける。

「お前がちゃんと食べてる所見たこと無いからな。ついでに作ってみたんだ。

不味かつたら捨ててもいいからな？」

「……え？」

軽く微笑みながら、早く受け取れと促す。

その物言いは、まるでサスケが自分で作つたかのようで。その予想外の出来事に、その目をまじまじと見返した。

「ん、いらないのか？ ジヤあチヨウジニドモ……」

「いや、こる！ いのちばよつー！」

反射的にその手を掴み、奪つよつに弁当を受け取る。

そのどこか必死な様子に、サスケは悪戯が成功したかのように笑うのだった。

「とつあえず、外行こつか。ここじゃ落ち着いて食べれそうにない」

サスケは軽く周囲に視線を走らせると席を立つ。

室内に残つた子供達が、チラチラとこちらを伺つているのが嫌でもわかる。

さすがに事件への好奇心から無神経に近寄つてくる輩は、こと“J”とくナルトが牽制していたからか、今ではほとんどいない。

「ああ、わかつた。……ありがと」

ナルトは勝手に緩む頬の筋肉を叱咤し、なんでもない表情を取り繕いつつサスケの跡を追つた。

木々に隠れ、うまく死角になる場所を選び、腰を落ち着ける。サワサワと葉擦れの音が響き、遠く子供達の声が聞こえてくる。教室内とは違い、落ち着いた平和な空気があたりを満たしていく。

二人並んで弁当を広げ、手を付けようとしたその時、近付いてくる数人の足音が聞こえてきた。

その足音が、楽しそうな声を響かせつつ近くで止まる。視界に入ってきたのは、一人が見慣れた姿だった。

「あれ？ サスケ君？」

「サスケくうくん、こんな所で会えるなんてつ

「あつ、そのつ、一緒に食べてもいいかなあ？」

ヒナタは純粋に驚き、いのとサクラはこれ幸いと行動を起こす。

サスケが返事を返す頃には、すでに左手にいたのが、正面にサクラが座っていた。

そんな行動を、ヒナタはどうか感心したふうに見つめる。

応援するとは言つたが、これは応援が必要なのだろうか？

そんなふうに思いながら、サクラの隣、ナルトの前にそつと座つた。

それぞれが自分の弁当を広げ、他愛ない会話をかわしつつ食事を進める。

そんな中、ナルトの半分ほど減った弁当を見、思わずとこりようてヒナタが言葉をこぼす。

「あれ？ ナルト君のお弁当って、サスケ君とおそろいなの？」

「おう！ サスケが作ってくれたんだってばよー。」

「「は？」」

ナルトとヒナタの会話など、ほとんど聞いてすらいなかつた二人が、そろつて声を上げる。

「ちょ、ちょっとそれどうこうことよつ！」

「そうこうことは先に言いなさいよねー。私のと交換してあげたのにはー（あんたが食べるなんて、もつたいなわざがるのよつー。）

「先に言つもなにも、そんな話聞いてないし……」

そのあまりの剣幕に、女子の言つ分けいつも理不尽だと思いながら、ナルトはささやかな抵抗を試みる。

が、その一人の厳しい視線に負け、サスケに目線で助けを求めた。

「一人とも落ち着いて。まああれだよ、作りすぎたからね。ナルトのはついでだよ。」

ナルトが食べなかつたらチョウジが食べてたんじやないかな」

「一人はどこか納得できないながらも、ナルトのためにわざわざ用意したわけではないということで、なんとか落ち着きを取り戻す。それでも、羨ましい事実は目の前から消えることもなく、厳しい目線は相変わらずだったわけだが……」

「それはそうとサスケ、お前いつも屋敷の人が用意してくれてただろ？ 今日に限つてどうしたんだ？」

「あれ？ 言つてなかつたか。

俺昨日から家に帰つてるんだよ」

「お前、それつて……」

「うちは一族の住んでいた一角は、今では誰も住んでいない。そこに帰るということは、凄惨な事件の起きた現場のまつただ中に住むということだ。」

もちろん、サスケの家もその現場であることに変わりはない。

「いや、気にしないで。大丈夫だから。どれだけ変わらつとも、あそこは俺の家だからね。」

部屋だけは多いから、いつでも遊びに来いよ？  
なんなら泊まつてつてもいいぞ？」

「じこか冗談めかして笑うサスケの言葉に、重くなりかけた空気がいくらか和らいだ。

その空気を知つてか知らずか、やわらかな声が言葉を紡ぐ。

「じゃあ、サスケ君は『ご飯自分で作ってるの？ お弁当くらい用意しようつか？』

「あつ、もつもちろん、ナルトくんも……」

「ヒナタする？ い！ 私も作ってきてあげるわよつー？」

「あんたなんかに料理出来るわけないでしょ？ 私が作ってきてあげるわね」

誰の料理が一番うまいかだの、『じこ』は穏便に順番に用意するかだの、やはりサスケの手料理が食べたいだの、それならせつかくだし押しかけてあわよくば……だの、不穏な方向に向かう話を、残された三人は少し呆れた目で見守るのだった。

「サスケ、弁当詰かつたぞ。ご馳走様。お前料理も出来たんだな～」

「そんな燃料を投下しながら……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1429u/>

---

私がうちはの彼とか無理すぎるw

2011年10月8日21時24分発行